東海支部報

日本山岳会東海支部

No. 170　July. 1. 2022

発行　公益社団法人
日本山岳会東海支部
〒460-0014 名古屋市中区富士見町8-8 OMCﾋﾞﾙ
電話：052-332-8363　FAX：052-322-7924
郵便口座 00800-5-13749「日本山岳会東海支部」
銀行口座 三菱UFJ銀行 覚王山支店
普通1222073「日本山岳会東海支部」
編集　星　一男
印刷　㈱ 浅井隆文社

カンチュンナップ峰頂上に立つ谷(左)と山田　本文P6参照

目　次

○令和3年度支部通常総会　今津英一朗　2
○第14次インドヒマラヤ隊壮行会　4
○令和4年度組織図　5
○カンチュンナップ北西壁
初登攀　山田利行　6
○登山学校第6期開校　服田康宏　12
○英語版「インド・ヒマラヤ」発刊　沖　允人　13
○山岳古道調査活動報告　西山秀夫　14
○山書蒐集夜話(その1)　安藤忠夫　16
○東海支部蔵書からの一冊32　石田文男　19
○トピックス　20
○春の3つのボランティア山行　前田隆久　21
○同好会コーナー　スケッチ　岩田智与子　22
○登山用具あれこれ④　千葉泰丈　23
○回想の登頂記③　杉浦吉治　24
○委員会報告　山行　鈴木慎吾
青年部/東海ユース／東学連　高橋玲司　26
○支部友コーナー　田中　進　29
○会務報告　今津英一朗　30
○ルーム日誌・会員異動　今津英一朗　33
○INFORMATION　星　一男　33
○編集後記

http://hp.jactokai.net/　E-mail jactokai107@gmail.com

令和４年度支部通常総会・第14次インドヒマラヤ隊壮行会

総務委員会委員長　**今津英一朗**

令和4年度支部通常総会と懇親会

5月15日(日)午後1時30分から、令和4年度東海支部通常総会がOMCビル4階講堂で開催された。本年度は、コロナ感染症対策を実施したうえで、会場いっぱいの支部員出席のなか開かれた。

冒頭、総務委員長から議決権の充足数について説明をおこなった。支部員総数342，ハガキによる委任状での議決権行使195，当日出席55となった。

高橋支部長の挨拶のあと規約により、高橋支部長に議長を委嘱し議事に入った。

第一号議案として令和3年度事業報告と決算報告：今津総務委員長の事業報告に関する説明および奥山会計担当の決算報告に関する説明がなされた。採決の結果、当議案は可決。

第二号議案として令和4年度の新体制：役員案及び組織図案が提出された。

役員変更：

① 監事：山田　明美氏が就任。

② 新委員長：

山行委員会：稲葉　真英氏

遭難対策：　高松　信治氏

岳連担当：　鈴木　絵美子氏

東海学生山岳連盟：丸岡　春香氏

採決の結果、当議案は可決。

第三号議案として令和4年度事業計画及び予算：今津総務委員長による事業計画案、奥山会計担当から予算に関する説明があった。採決の結果、当議案は可決された。

総会後にはOMC4階講堂にて懇親会を開催した。55名が集い、日頃の山行の意見交換などで懇親を深めた。

支部長あいさつ　　支部長　高橋玲司

令和4年度を始めるにあたりご挨拶をさせていただきます。

2年にわたり人類を苦しめ、活動自粛が余儀なくされた新型コロナウィルスの感染状況も、少しずつ沈静化され、活動も徐々に増えてきました。支部員皆さんも山で集える事の楽しみが、着実に増えてきた事を実感しているのではないでしょうか。一方コロナに向き合う生活で『新しい生活スタイル』へと社会は随分加速度的に変化しました。当支部もウェブ併用など、時代への対応も模索しながらの活動をしていただきたいと思います。

昨年度は、記念すべき60周年の区切りの年であり、周年記念式典も何とか縮小で挙行しました。60山ラリーでは多くの人が達成され、山への情熱は持たれていると実感しました。

そして久しぶり海外登山では、カナダで活動を行っている山田利行君、谷剛士さんが、ネパールヒマラヤのカンチュンナップ北西壁を見事初登攀成功する快挙が飛び込みました。お二人の絶え間ない努力の結晶が、支部活動に花を添えてくれました。今後の活躍も期待するところであります。

さらに14次を迎えた、インドヒマラヤ隊も注目であります。ベテランでもパフォーマンスのできるヒマラヤ登山として、多くの方々に希望をもたらす計画であります。沖総隊長、星隊長の元、無事成功裏に終わることを祈念しております。

さて昨今、若年、青年、中高年含めて、山に人は回帰しています。しかしながら、山への向き合い方も、人それぞれではありますが、『個』を主体とした延長であり、山のステップアップや交流において『山岳会』は選択肢に低順位であるということを感じます。情報も多くあふれ、スマホの情報だけでいとも簡単に多様な山を実践できてしまうのも現実です。しかし、登山者のステップアップには『個』では限界もあります。そこで、山岳会の活動は重要なのであります。ひざ詰めで話し合い、情報交換を行い、そしてステップアップの提供の場、リアルに仲間を作りコミュニティを

作れる場として山岳会の楽しさを伝える事が必要ではないでしょうか。

また、東海支部には様々な委員会があります。支部ライフを楽しむ為には、委員会活動を無くしては語れません。例えばスキルアップには、支部友、登山学校、山行委員会、技術向上員会、青年部などの活動があります。山の楽しみ方も様々であり、活発に行っている『猿投の森作りの会』と連携した活動も期待されます。高齢化社会を支える亀の会の活動も注視しています。ほかにも、ボランティア、自然保護、写真展実行委員会、図書、デジタルメディア、遭難対策、総務など自身の趣向にあった委員会、同好会を探して、日本一楽しい山岳会を目指し、委員会同好会に加入ください。

今年度は、コロナ対策を講じたうえで、支部員皆様が安心して活発に登山活動が行える事を期待し、年度のあいさつとさせていただきます。

新任挨拶

山行委員会委員長
稲葉真英

この度、鈴木前委員長から引継ぎ、山行委員長を拝命することとなりました稲葉真英です。今後、微力ながら委員長として更なる支部山行の活性化に取り組んでいく所存ですので、よろしくお願いします。

登山は、ひとくちに登山と言っても行先、ルート、時期、山行形態等により千差万別であり、目的・楽しみも十人十色で人それぞれです。支部山行においては、幅広く様々な山行を用意することにより、多くの支部員、支部友会員の皆さまに一層登山を楽しんで頂くとともに、いろいろな山の楽しみ方を提案していきたいと考えています。また、自分達だけでは行けないような山、新たなジャンルの山行へチャレンジして頂く機会を提供することにより、技術力、経験値を上げステップアップする機会として頂きたいと考えます。

支部山行は敷居が高いなどと聞くこともありますが、決してそのような事はありません。自分でも参加できそうかどうか不明な場合、心配な場合には、支部山行ＨＰに記載の問合せ先へ遠慮なくご相談ください。

支部山行では、諸先輩方のお陰で、大きな事故を起こすことなく、運営してきております。今後も安全登山に留意して実施して参りますので、ご協力をお願いします。

東海学生山岳連盟委員長
丸岡春香

この度、新しく東海学生山岳連盟の委員長になりました、丸岡春香です。日頃より学生に対しご支援、ご指導いただきありがとうございます。

学生連盟では、自分自身は先輩方のご指導のもと冬山やクライミングに挑戦することができました。とても良い経験になりました。

今後はまず学生連盟の再興を目指し、これまで私が先輩方から教えていただいたことを後輩たちに教えていけるように精進したいと思います。

先日行なった新歓山行では、久しぶりに10名以上の学生が集まって活動ができました。これからもたくさんの学生と交流できるように頑張っていきます。

様々な面で未熟なところがあると思いますが、今後もご指導のほどよろしくお願いいたします。

岳連担当
鈴木絵美子

今年度より愛知県山岳連盟の担当を引き継ぐことになりました鈴木絵美子です。

入会から10年間東海ユース第1期生として活動を始め、

現在は東海ユースの副代表を努め、技術向上委員会、東海ASC、本部の山研委員会に所属し活動をしております。

今回岳連担当をお引き受けしたのは、まだまだ山の経験も浅く講習会等で知識を増やし、他の山岳会の方々と交流することで、活動の範囲を広げることができればと考えお引き受けしました。

今後、愛知県山岳連盟の開催する講習会やイベント等の情報を会員の皆様と共有していきたいと思っております。興味を持たれた方がいらっしゃいましたら、是非ご連絡いただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

遭難対策委員長
高松信治

この度、山田明美前委員長より引継ぎ、遭難対策委員長を拝命いたしました高松信治(たかまつのぶはる)です。

甚だ微力ではありますが、委員長として遭難防止活動を推進していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

登山という行為には多かれ少なかれリスクを伴います。登山者はその対策として例えばザックにカッパやヘッドランプ等の装備を入れ、登山届を提出して山に向かいます。安全な登山を目指して、気象や登山道の最新情報を入手される方も多いと思います。

東海支部では登山届の提出をお願いしています。この登山届には万一遭難してしまった際の捜索・救助を円滑に行うための情報がまとめられていますので、確実に提出することが必要です。この登山届は遭難してしまったときに力を発揮しますが、遭難を防止するためには、登山の参加者がリスクを認識・共有してその対応力を検討する登山計画書の作成が重要です。

登山届の提出率向上はもちろんですが、遭難防止の基本である登山計画書の作成、提出に向けた活動が今後も必要です。皆さまのご理解ご協力をお願いいたします。

第14次インドヒマラヤ隊壮行会報告

総会に引き続き、同会場で第14次インドヒマラヤ隊の壮行会が行われました。最初に沖総隊長の概要報告と星隊長による個性豊かな隊員諸氏の紹介が行われました。次に栗木副隊長、岩瀬登攀隊長、隊員の印藤夫妻から遠征に参加する決意表明が行われました。都合により参加ができなかった鍛次隊員を合わせると計７名の隊員構成です。

壮行会の最後に登山本部・高橋支部長より、10万円の助成金目録と支部旗が手渡されました。

計画の概要

目的の山　インドの北部、旧ジャンム・カシミール州のパンゴン山脈の未踏峰３座をめざす。国境が近く、地域的にインド政府の許可が下りない場合は、カンユセー山郡の南部未踏峰を目指す。

日　程　６月20日（月）～7月21日（木）

現地エージェント

GREATER INDIA TOUR&TRAVELS

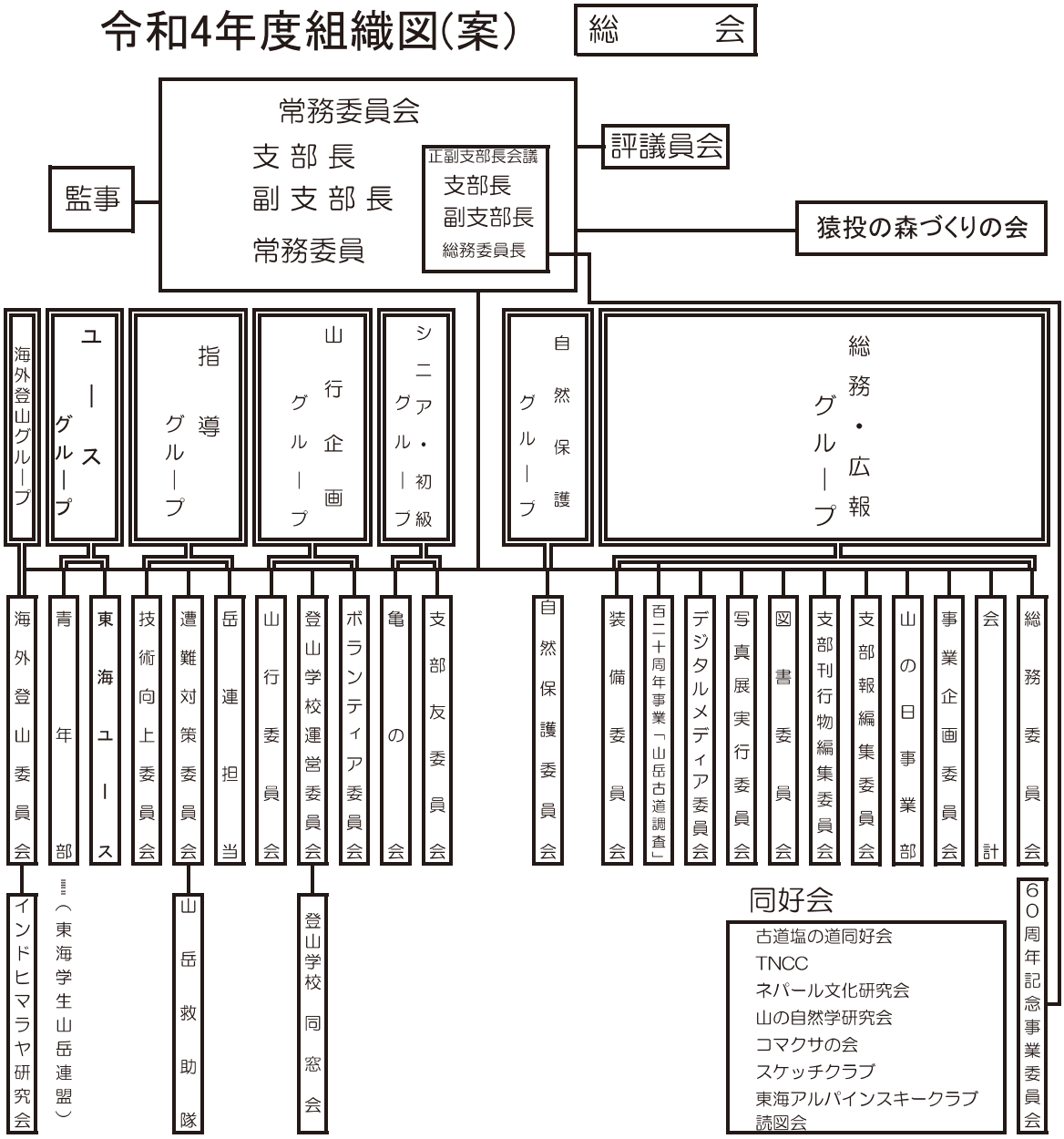
現地エージェント

HP州マナリのTREK INDIA OUTDOORS

今回の遠征には、愛知県山岳連盟と中日新聞社より名義後援をいただきました。

無事登頂されることを祈念いたします。

令和4年度組織図(案)



・正副支部長会議はチャレンジ基金などの使途を含めた支部業務全般の調整をする。
・山岳救助隊は必要に応じて設置される

東海支部60周年記念登山
カンチュンナップ(6089m)北西壁 初登攀

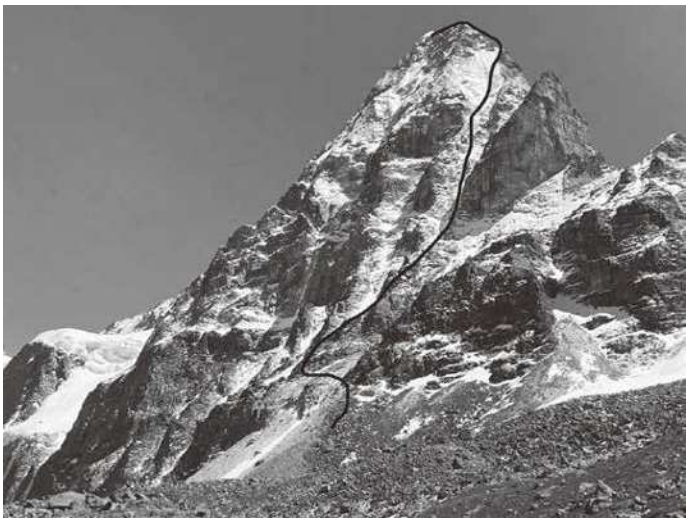
支部員　山田利行

カンチュンナップ北西壁　初登攀

カンチュンナップは1953年にエドモント・ヒラリーらによってエベレスト登山のトレーニングの一環として、南面から初登頂された。

一方急峻な壁である北面側は、2014年のチェコ隊を皮切りにトライされ初め、2016年の日本登攀クラブ隊、2019年のイギリス隊によってトライされたが、いずれの隊も頂上を踏むには至らなかった。

今回私達は、2019年にイギリス隊がトライした北面を狙ったが、壁がドライで氷が未発達だったため、コンディションの良かった北西壁に転戦し、初登攀に成功した。北面側からの初めての登頂となった。



北西壁登攀ライン

計画の始まり

私と谷がこの山の事を話始めたのは、コロナウィルスが広がる前の2019年秋に遡る。2020年の春にどこかヒマラヤの未踏の壁にチャレンジしないかと谷に話を持ちかけたのがきっかけであった。その時は明確な山は決まっておらず、谷と話し合う内に幾つかの条件を二人で決めた。「二人が経験のある6000m前半の山」「アルパインスタイルで傾斜の強い壁であること」「アプローチが比較的容易でクライミングに集中できる環境にある山」「情報の比較的ある山域」等々。要は、比較的簡単にアプローチでき、見栄えの良いヒマラヤの未踏の壁をアルパインスタイルで登りたいということである。

それらの条件の中に当てはまる山が「カンチュンナップ北壁」であった。2019年にこの壁にトライしたイギリス隊の記録を読み、「これだ！！」と目的の山が決まり、早速東海支部の高橋支部長と尾上さんに連絡を取ったのであった。私の遠征に対する想いを快く汲み取って頂き、今回の計画が動き始めたのだが、周知の通りコロナウイルスの世界的拡大により、計画は2回見送られ、2年間の忍耐の末ようやく遠征に行ける運びとなった。

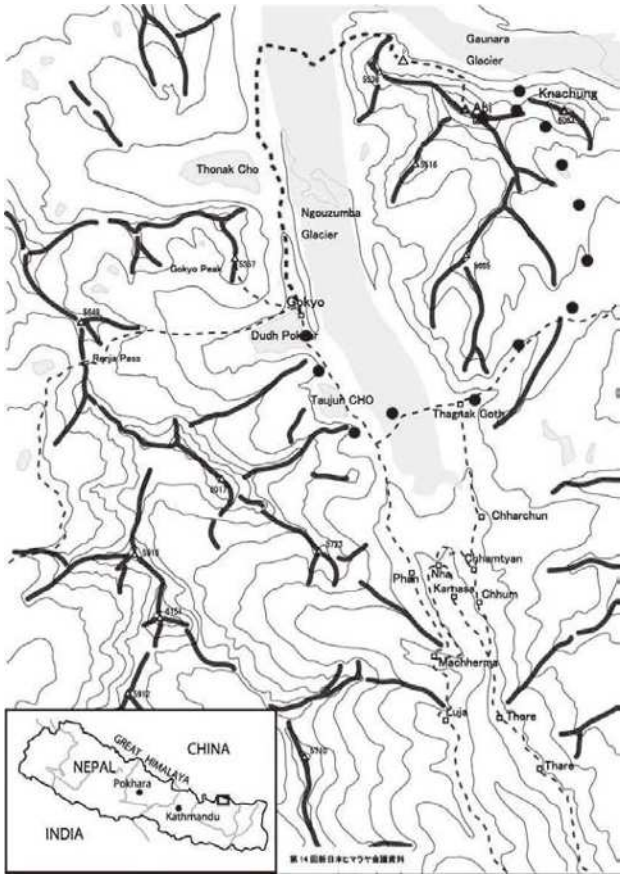
出国、9年ぶりのネパールへ

冬の間、私達はカナディアンロッキーでトレーニングを積んだ。二人とも仕事に生活と忙しい毎日であったが、絶対に登りたいという気持ちのもと、予定を合わせて山へと出かけた。ヒマラヤでのクライミングを想定し、アルパインクライミングの技術を磨いたり、重荷を背負ってのクライミング、はたまた傾斜の強い壁で快適に寝るためのビバークの訓練などを行った。

その後、3年半ぶりに日本へ帰国し、最後に富士山での高所順応を終え出国したのであった。

遠征にアクシデントは付き物だが、いきなり成田空港で20kgの超過料金6万円を支払う羽目になったり、遅延のため乗り継ぎできず、クアラルンプールで一晩過ごすことになったりと旅の初めから前途多難である。

翌日、無事に入国でき一安心。そのままガイドのパサンに連れられ、カンリトレックの事務所へ。旧ロールワリントレックという会



登攀概念図

社で田辺さんらの遠征隊も利用しており、話が弾んだ。契約を交わし、タメルでルピーに換金して(100円＝97ルピー)ホテルへ向かった。翌日、登山許可を申請するも、明日になると言われる。私は気を付けていたにも関わらず、昨晩のモモが当たったかのか朝から胃もたれと胸焼けがある。昼にエージェントから連絡あり、ガバメントオフィスへ行きパーミッションをもらう。結局その日は何も食べられず、終日水だけで過ごすことになる。体調は最悪であったが、ようやくキャラバンがスタートできると思うと心が弾んだ。

朝起きると寒気はなくなり体は大分楽になっており、一安心だった。ようやく、けたたましいカトマンズから脱出できる。と思いきや、7時半から空港でフライトを待つも12時前に悪天候のためフライトキャンセルとなる。もう一日カトマンズで滞在するか迷ったが、週間天気は良くなく、フライトの目処が立たないので、ヘリを5人で割って1560ドルを支払いルクラへ飛ぶことにした。予想外の出費に今後の予算が心配になる。今後は計画的な節約生活をしていくことにする。ここまで予定通りに行かないとは。日程に余裕を持って来ていることがせめてもの救いである。

キャラバン

外は生憎の天気であったが、9年ぶりのルクラそして山を歩ける喜びで二人ともテンションが上がる。ここからは日記風に日々の行動を書いていく。

4/8 (金)ルクラ～モンジョ 曇り

ようやくキャラバン開始。
パクディンは建物が乱立し、以前よりも大きな村になっており、時の流れを感じた。2時にモンジョに到着。雨が降り始める。4時から裏山3100mまで歩く。

4/9モンジョ～ナムチェ 曇り

ナムチェには2時間半で到着。ガス缶、行動食、Everest linkというWifiカードを購入する。その後各々 クムジュン3900mくらいまで順化活動。夜、私のSNSを見たチェコ人クライマー(昨年カンチェンサーを登った)から連絡が入りカンチェンナップの情報提供をしてくれる。クライマーの世界は狭い。

4/10 ナムチェ～ターメ3800m 晴れのち曇り

ここからは谷も私も未知のトレックで楽しみだ。ターメまで犬達と歩く。ティンカンボチェの北壁やノースピラーが見えテンション上がる。ターメの村ものどかで素敵だ。午後裏山のSundre peakの肩（4300m）まで高度順応に出かける。夕飯はダルバート。ターメの村は野菜が充実しており最高であった。

4/11 ターメ～ルンデン 晴れのち曇り

出発前にオーナーのペンバさんが祈願の布をくれる。天気も良く初めて晴天の中トレッ

キング。
　ルンデン到着後、裏山で順化5100mまで。ルナーグ山群、キョジョリなど錚々たる景色に感動した。

4/12 ルンデン～ゴーキョ 晴れ
　この日は5400m弱のレンジョパス超え。朝5時おきで出発する。8時40分にレンジョパス、ゴーキョ10時半と順調に歩を進める。レンジョパスからはエベレストやチョーオユー、チョラチェ、僕達のオブジェクトのカンチュンナップの南面がよく見える。流石に頭がボーッとする。今回最終的にBCとなるゴーキョでキャンピングギアや10日分の食料、クライミングギア等をポーターが運ぶように3つのパックに分ける。明日は待望のカンチュンナップ北西壁との対面の日である。荷物も重く、ルートファインディングも厳しいことが予想されるが、とても楽しみである。

タクティクスの変更と高所順応
4/12 ゴーキョ～ABC設営　晴れ
　順調にキャラバンを終え、5thレイク手前から尾根に上がりンゴズンバ氷河の渡渉ポイントを探すも地球温暖化のせいか、モレーンの崩壊が進んでいるのか、氷河に降りるポイントが見つけられない。谷とガイドのニマと話しあい、これ以上ポーターが進むことは出来ないと判断し、荷物は自分達で運ぶことにした。ゴーキョに戻りながら渡渉ポイントを何とか見つけることができた。明日はここから氷河に下り、ABC設営に向かうこととなった。ゴーキョに戻りポーターをリリースする。その時点で荷物全てを本来のBCに運ぶことは現実的ではないため、実際にアタックに使うクライミングギアや食糧だけを荷揚げすることに決める。その時点でゴーキョがBCとなり、本来のBCにはABCを設置することになった。

4/14 ゴーキョ～ABC 晴れ
　6時発。モレーンをかいくぐり11時半にABC到着。氷河は竜の背のようにアップダウンが連続したことと、荷物が重くかなり疲れた。水が濁っててフィルターが必要だった。テント設営後取り付きを確認しに行く。今シーズンはどの山もドライでカンチュンナップもそ

ABC設営に向かう

の例外ではない。当初のイギリス隊のラインには氷が無く、日本登攀クラブがトライしたラインに照準を定めた。クライミングは困難が予想されるが、雪崩や落石などの外的要因がほぼ無く、じっくりルートに取り組めることが分かったことは大きかった。BCは終日西日があたりかなり快適である。北側にチョーオユーとギャチュンカンの南壁、東側にはエベレストとこんな贅沢なロケーションは世の中にあるのだろうか?カンチュンナップも北壁にもかかわらず日没までずっと日が当たっている。防寒着を軽量化できる気がした。
　久しぶりのテント泊は寒いが静かでようやく山での生活ができた気がした。

4/15 ABC～ゴーキョ 晴れのち曇り
　朝起き、高所順応について話し合う。8日間の連続行動に加え、5000mという高度による疲れが全く取れておらず、順応が上手くいっていないのでは?という結論でゴーキョに戻ることにする。
　来た道はコンディションが悪いので、今後の為に違うラインをトライする。
　相変わらず、起伏が激しく消耗させられる。谷がモレーン上に上がるショートカットを見つけ今後は少し楽になりそうだ。疲労激しく、2日間はレストすることを決める。2年間写真の中にあった壁、山を自分達の目で見ることができ、気合いが入ったことは確かである。ほとんどのクライミング、キャンプギアも荷揚げできたし、目標のラインも定まった。後は焦らず、疲れを取り、順化活動を完了させるだけだ。

4/16ゴーキョ レスト 晴れのち曇り

今回初めてのレスト。夜は鼻のつまり、喉の痛みで良く寝れない。1日中ロッジでダラダラ過ごす。ロッジの中も終日寒く風邪ではないかと心配になる。

4/17 ゴーキョ レスト晴れのち曇り

レスト2日目。昨晩よく眠れ、気持ちの良い目覚め。明日以降の出発をどうするか話し合い、夜に再度決めることにする。

昼に少しギア分けをし、ボルダーに出かける。いくつか掃除しながら良い課題をトライする事ができた。息切れはあるもクライミングはできるようだ。このロケーションでのボルダリングは本当に贅沢。ポーター達が不思議そうに見ていた。

夜、身体は大分回復していて、「もう明日からトライしちまうか!?」というノリになったが、明後日の天候不順がネックで、自分達は時間がたっぷりあり、焦る必要はないと我に返った。当初の予定通り、南面の下降路偵察と高所順化をする事にする。

4/18 ゴーキョ～チョラツェ側下降路T.S 晴れのち曇り

タグナクに向かう途中、モレーン超えた所でカンチュンナップ側のスクリーに入ることに決める。最後は完全なスクランブルで以外に悪い。反対に出たらカンチュンサー側の下降路と似た感じのテレインに出る。もう少し尾根をつめるもナイフリッジのがんりょうで引き返す。5600m。下降路とするならカンチュンナップとサーのコルへ降りた方がいいことが確認できた。5400mのレイク脇でキャンプ。

4/19 TS～ゴーキョ 晴れのち雪

前日の寝不足から頭痛と吐き気がする。高度障害と朝食を食べすぎた。谷から言われたのは登りのスピードが早すぎるということ。今後はゆっくり登り体力を温存することと寝不足の場合朝食は軽くした方がいい事を確認出来た。無事に下降路の確認と高所順化を終え、ゴーキョに戻る。昼過ぎから予報通り雪がチラつき始める。私達の判断はあっていたようだ。

4/20 ゴーキョ レスト晴れのち雪

予報通り朝は晴れたが、1日中雪。

22日の天気が悪くなっていて心配になる。が、とりあえず朝ゆっくり起きて判断する事とした。

カンチュンナップ北西壁　初登攀、南面下降

4/21 ゴーキョ～ABC　晴れ

朝は晴天。雪は5cm程度か。今までの天候サイクルからそれほど悪天にはならないだろうと判断し、出発を決める。明日の悪天候に備えて一応食料を増やす。8時半に出発。最大限にゆっくり歩き、体力を可能な限り温存する。ようやくイギリス隊のトレースも見つけABCへの最短ルートが見つかった。ニマには下山したらここまで迎えに来るように伝える。4時間弱でABC到着。谷がギアのデポと水汲みに行ってくれた。相変わらず素晴らしいテントサイトだ。明日からのワンプッシュで登り切る気満々である。

4/22 GOアップ 5500mTs 晴れのち雪

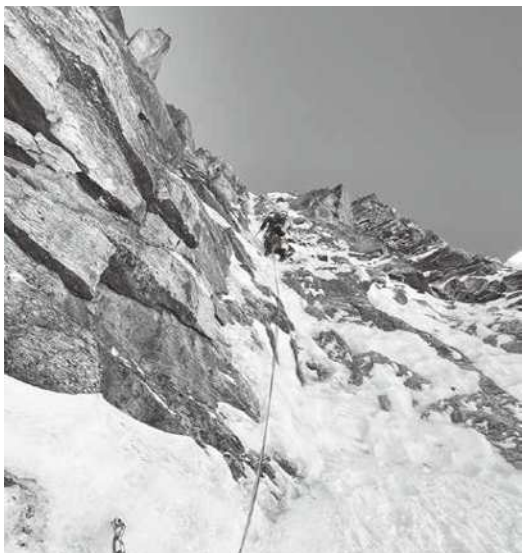
今日は核心部手前で早めにテントを張る予定だ。ゆっくりと6時起き8時に出発。10時クライミング開始。1ピッチのアイスクライミングの後は50度程度の緩い雪壁をノーロープで上がる。3時間で核心手前まで登る。ロッキーと同じ固まらない下ザラメ雪に苦戦し、快適なテントサイト作りに難儀した。結局場所を変え、岩のテラスに設営した。3時から雪が降り始める。一瞬明日は停滞かと不安になるが、1時間程度降って止む。頂上まで残り600m弱、ここまで3時間しかかかっていないことから、明日ワンプッシュで頂上を目指すことに決め、寝袋、ガス缶、食料、マットをここにデポすることにした。これがロッキーで学んだライトアンドファストスタイルだ。明日登りきれなくとも、1日くらいは耐えられるトレーニングはしてきたつもりだ。

4/23 サミットプッシュ 晴れ

日の出と共に5時に行動開始。ここからピッチクライミング開始。核心部分と思われた箇所はスナイスが発達していてベストコンディション。昨日の降雪で太陽当たるとスラフが来る。高度のせいか1歩1歩が苦しい。焦らず、着実に高度を伸ばす。上部の氷河は傾斜は緩いが、足取りが重く、ふくらはぎが悲鳴をあ

げていた。60mロープだが、30mで切らざる得ない場面もあった。クライミングを開始して11ピッチを伸ばし、氷河を登り切り、5900mの肩に出る。

核心部を超え上部万年氷を登る谷



核心のミックス帯を登る山田

2014年のチェコ人の記録ではここでビバークし、敗退しているが、彼らの記録のような快適なビバークサイトは無く、彼らの記録は間違っていて5900mまで登っていないと想像する。

ヘッドウオールは傾斜緩く簡単だが、ボロボロの壁。落石を落とさないように、細心の注意が必要だった。ヘッドウオールから頂上までは至近だと思っていたが、更に不安定な氷河のナイフリッジを4ピッチも登らなければ行けなかった。高度のせいで足に力が入らず、数歩歩いては止まりを繰り返す。先を行く谷が雄叫びをあげる。どうやらそこが頂上のようだ。日暮れが迫っているが、焦りは無かった。ただ頂上に立ちたいと思った。

延々と続く氷の壁

16時に頂上へたった。平らな雪面に座り込み、計画からここまでの2年間分の感情を爆発させてやった。と同時にここまでのプレッシャーが一気に解放され、谷と喜びを分かちあう。今まで2人でカナダで登ってきたことが、証明された瞬間でもあるのだ。相変わらず凄いロケーションに興奮する。東にはルナーグ山群、北側にはチョーオユー、東側にはエベレスト、南側にはタウチェにチョラチェの最高のパノラマだ!数分間の写真撮影ののち我に帰る。日暮れが近いのだ。

同ルート下降はナイフリッジとヘッドウオールの落石懸念から谷が反対に降りることを提言してきた。ギアの回収は手間だが、下降の偵察をしていたこと、別ラインで下降する

頂上に続くナイフリッジを行く谷

美しさを考慮し、別ラインすなわちカンチュンサーのコル経由で南側へ降りることにした。

高度のせいか力が入らず、懸垂の一挙手一投足が重たい。今までどんなに疲れていてもこんな経験はしたことが無い。これが高所のクライミングの厳しさなのか。ゆっくりだが、確実に支点を構築し、交代交代で8ピッチの下降を終えたのが、すっかり夜もふけた22時。カンチュンサーとのコル付近氷河に降り、テントを設営し、着の身着のままでビバークに入る。寒く全く寝れないが、登頂した喜びが強い。ウトウトしては「やったな!」「登ったぞ」などと自分達を励ました。ジェットボイルは全然暖かくないが、無いよりマシだ。1日中ガスを炊き、朝を待った。

4/24 Ts～ゴーキョ

5時待ってましたと日の出と共に行動を開始する。身体を休めたおかげかいつも通り動くことができた。チェコ人のインフォメーションから下降ラインは頭に入っている。コルからは簡単なスクランブルをこなし、2時間足らずで安全地帯のメドウに降り立つことができた。谷と今回の山が終わったことを喜びあった。

頂上にて谷（左）と山田

終わりに

私達の登攀成功は周到な準備と現地でのタクティクスの柔軟な対応がもたらした成果である。私も谷もクライミングに関してはカナダで十分に経験を積んでおり、カンチュンナップの北面を登れる技術には自信があった。しかし、高所の経験が少ない事、ネパールの環境に適応できるかという点が不安材料であった。それらのリスクをマネージメントする為に、余裕を持った日程を組み、何かアクシデントが起こったとしても、焦らずに対処できるようにした。これは今回の旅全体を通して私達の行動と結果に大きく影響したと思っている。当初の目的であった北壁はコンディションが悪く、北西壁に転進することにはなった。北西壁も少なくとも私達には十分に魅力的なアルパインクライミングの対象であった。その為、特に悲観することもなく、自然の差し出してくれるラインを登ったまでの話である。アタックを開始するまでは、ヒマラヤ遠征特有のトラブルに見舞われたが、それらを上手く二人で対処できた事は、私達の素晴らしい経験になった。いざクライミングが始まってみると、壁は最高のコンディションを私達に提供してくれ、二人とも心底ビックリした。傾斜は強く、身体の疲労は今までに感じたことの無い厳しいものであったが、それでもなおクライミングを楽しむ余裕があった。それは自分たちの高所順応、タクティクス、準備が上手くできていた証拠である。頂上に立った時、今までのプレッシャーから解放され、２年越しの悲願が叶った瞬間であった。

今回の登山は東海支部60周年記念登山として、日本山岳会本部、日本山岳会東海支部を初めとする多くの企業や個人の皆様の支援により実施することができました。忘れることのできない登山ができたことを、この場をお借りして、心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

隊員　谷　剛士（40）支部員
隊員　山田利行（37）支部員

※本事業は、公益社団法人　日本山岳会の海外登山助成金および東海支部のチャレンジ基金の交付を受けています。

第６期登山学校開校

登山学校運営委員会委員長　**服田康宏**

1月21日に出された「まん延防止等重点措置」も3月21日に解除され、登山学校も日常を取り戻した。４月からは予定されていた山行も順調におこなわれ、胸をなでおろしている。特に中級クラスでは４月から６月にかけてテント泊山行が計画されている。昨年はコロナ禍でほとんど実施できなかっただけに、ぜひ有意義なものにしていきたいと思っている。ただ、今年は積雪が多かっただけに１月～３月の山行が日帰り・愛知県下に限定されたのは本当に残念であった。

さて、2017年に開校した登山学校も７月９日に第６期がスタートする。今期からクラスの呼称を変更し、初級クラスを「Aクラス」、中級を「Bクラス」とした。漠然とした言葉のイメージではなく、学習内容によってクラスの違いを明確にするためだ。

Aクラスのテーマは、「自立した登山者になるための知識の習得」である。山行は日帰りに限定するが、積雪期にはワカン、軽アイゼンを使用する。読図を中心に山でのルールやマナーに関する知識、正しい歩き方やセルフレスキューの基礎などを学習する。Bクラスではテント泊山行、雪山の歩行技術を学ぶ。無雪期のテント泊山行に加え積雪期にはアイゼン、ピッケルを使った登山をおこなう。もちろんBクラスの受講生は、Aクラスの学習内容や体力などが身についていることが前提となる。

Bクラスの4月山行

今期は机上講習の見直しもおこない、あらたに「山岳遭難の現実」と題した講座を加えた。恒例の気象講座は、今期は夏と春に開催する。例年冬のみであった装備講座は、夏と冬の２回。夏山編では道具の選び方だけでなく、メンテナンスについても学ぶ。気象講座、装備講座ともに遭難対策委員会との合同開催で、広く支部関係者に受講していただける講座とした。

第６期は上級クラスがいったん休校となり、Aクラスが３教室、Bクラスは１教室での運営となる。教室数は少なくなったが、より密接な指導をおこない一人でも多くの自立した登山者を育成していきたいと思っている。

Aクラスの5月山行

上級クラス山行

日本山岳会東海支部創立60周年記念出版

『インド・ヒマラヤ』英語版が出来ました

『Indian Himalaya,An Illustrated Guide for Mountaineers』

インド・ヒマラヤは、パキスタン国境に接する「東部カラコルム」から始まり、ネパールの国境に接し、さらに東の「シッキム・アッサム」とブータンの東のヤルツァンポ渓谷に至る「アルナーチャル」まで、標高5000mを超える約5000座の山々の連なる長大な山脈である。

英語版では、この山脈を13の山域に大別し、約800座を選び、位置と山容の説明と特徴に加えて、世界諸国から挑んだ登山の歴史を概説した。文献もできる限り示した。登山者のために役立つ概念図を38図挿入した。山の写真もできる限り多く挿入する努力をした。

編集者にはインド・ヒマラヤに精通した日本人だけでなく、世界的に著名なインド人も加えて万全を期した。

「インド・ヒマラヤ登山年表」と「インド・ヒマラヤ山名表」を付録とする計画であったが、頁数が約2倍になり、出版の費用がかさむのを苦慮して、「インド・ヒマラヤ登山年表」の概要と見本頁のみを載せることにした。ただし、この登山年表と山名表の全文は、日本山岳会東海支部のホームページに「インド・ヒマラヤ資料」として載せてあるので下記をクリックして開き、活用していただきたい。

公益社団法人 日本山岳会東海支部 -

Tokai Section of Japan Alpine Club (sakura.ne.jp)

印刷と製本は、名古屋の歴史ある出版社「風媒社」が全力を挙げて作成した。

B5版・500頁・ソフトカバー・100部限定出版で、特価・5000円

申し込みは・日本山岳会東海支部事務局・460-0014・名古屋市中区富士見町8番７号・OMCビルB1、メイルによる申し込みは・E-mail:okimasato1935@yahoo.co.jp /khoshi@katch.ne.jp

にお願いします。

For foreigners: US $50, include tax and transport charge.

Published by Tokai Section of The Japanese Alpine Club, Publisher: Fubaisha Co.Ltd, Nagoya,JAPAN
Supervisors: Harish KAPADIA and Kankan Kumar RAY　Editors: Masato OKI & Sadashige INADA & Kazuo HOSI
Contact(Payee Address):801-1-418 Ueda 3-chome, Tenpaku-ku, Nagoya 468-0051 Japan,
Email:okimasato1935@yahoo.co.jp/ khoshi@katch.ne.jp
Beneficiary Bank: MUFG BANK, LTD.　Branch: NARUKO-BRANCH, Japan: Name of Account Holder:Masato OKI
Beneficiary Bank BIC (SWIFT Code): BOTKJPJT　Beneficiary Account Number:299-0184323

山岳古道調査活動の報告（１）

支部古道調査委員会委員長　**西山秀夫**

東海支部で申請した山岳古道は①飯田街道②八風街道③尾鷲道の３つ。4月下旬から5月下旬にかけて③を除いてほぼ実地踏査を終えた。まだ未整理だがあらまし報告をしておきたい。

4月9日にルームで18時から20時まで山岳古道委員会の初会合になった。コロナでリアルな会合が出来ず、約半年後に実現できた。会合では取り急ぎ、東海支部で提案した古道の実地踏査の日取りを決めた。

・4/20（水）第１回　塩の道の伊勢神峠、杣路峠
・5/14（土）第２回　八風街道～八風峠～
・5/21（土）～5/22（日）第3回　尾鷲古道
　又口辻～まぶし嶺～尾鷲辻
　大台ヶ原山 尾鷲道 その１　尾鷲辻～又口辻～古和谷林道終点
　実施は以下の通り。

① **飯田街道**　2022.04.20

参加者：鈴木愼吾、井波、佐原、山田、熊谷、武内、村瀬、西山の8名

江戸時代は飯田街道と呼ばれた。今の国道153号である。名古屋市から豊田市足助町、稲武町、長野県飯田市へと通じる。三河湾で取れた塩を足助まで運び、荷馬に載せて塩尻市まで運んだから塩の道ともいう。今回は飯田街道のうち、昔のままに残されている峠の山道を歩いた。

最初は伊勢神峠を上下した。ここは東海自然歩道に整備されて道標が建ち、誰でも手軽にハイキングが楽しめる。多くの峠が車道になる中でここは古い時代に一車線分の幅のトンネルが掘られて峠越えはない。更に下にトンネルが掘られている。そして新たに大型車がすれ違える幅の新トンネルが工事中である。

伊勢神峠は艶れた荷馬を弔うための馬頭観音も建っていた。塩は重いから馬も喘ぎ喘ぎ上り下りしたであろう。歴史遺産とも言える。結構太い杉木立がいい雰囲気の峠道だった。ここは短いので早く下山したから次の目的地の杣路峠の入り口に向かった。

国道153号を東へ向かい稲武を通過、木地山の先に入り口がある。しばらくは林道を歩く

八風峠のシンボルの鳥居

八風街道

が少しで沢沿いの山路に入る。伊勢神峠道と違ってここは昔のままだから、道幅は狭く、沢に架かる橋も壊れそうだ。やがて沢から離れるが、道は左折するところを直進してしまった。途端に道らしい雰囲気はなくなり、右往左往して道の痕跡を探す。沢の左岸に石仏を眺めると峠道とすっかり信じた。それでも道らしい気はしない。地形図では沢から離れ山腹の破線路に描かれる。結局、おかしいので左へ左へと徒労とも思えるトラバースをしてやっと峠道と確信できる踏み跡に到達した。そこからすぐに愛知県と長野県境の境の道標の建つ所に着いた。ab780m付近。信じられないほど緩やかな蛇行を繰り返して大きなブナの木のあるユキヨシ親王の社に着いた。ここは以前、長野県側から来たことがある。そうして新たな林道をたどると待望の杣路峠だった。とはいえ、新たな林道の工事で切通しになり、石仏ははるか上に見え、峠によくある道標はなく、通り過ぎた。メンバーの一人が何気なく見た印が杣路峠の道標だった。プラスチック製のお粗末なものである。これで目的は完遂した。

林道が四方に分かれている。885mの３等三角点畑ヶ洞は徒歩30分程度とみて帰りがけの駄賃に触りに行くことにした。展望、山頂標もなく、頂上らしくもないが、本来の山頂はこんなもので素っ気ない。ここで初めておにぎり一つを食した。久々の山行で軽登山ではあるが腹筋が締まって空腹感はないので水分

はごくごく飲んでいる。

後はそろそろと下山。県境に戻り、峠道の発見場所からは未知の峠道になる。まことに歩きやすく、ずいぶんカーブもしている。重い塩を背負った馬がゆっくりと体に負荷を減らすように緩やかなカーブになっている。一か所は決壊場所もあったが上から巻いた。問題の道迷いの分岐には大きな栃の木があった。直進すると枝道と分かった。そこで少し戻ってみたら栃の木のあるところで左へ急カーブしていた。ここだったんだ。

道迷いの原因も判明して車に戻った。国道153号を走り、水別峠の手前で中馬記念館？に入館し塩の道をにわか勉強した。すべて終わり意気揚々と帰名。

資料を見ても植生についての記述はない。しかし、ユキヨシ社の大ブナといい、最後に見た唯一の大栃も樹齢200年はあるだろう。あの石仏は寛政年間だった。220年前の徳川家斉の時代だ。当時は栃、ブナ、ケヤキなどの自然林の森であっただろう。あの大木は象徴的に残されたと思う。

石仏はおそらくは岡崎市の石屋かも知れない。稲武の駒山には馬が列をなしたという。多数の馬が塩だけでなく石仏を運んだであろう。

樹齢200年といえば、設楽町の学術参考林に残された原生林も200年位だった。ブナ、トチ、ケヤキなどの大木が多かった。

段戸の国有林は戦前は御料林であり、江戸時代は天領だったから勝手に伐採は出来なかった。山周りのお役人も居たらしい。明治維新後に古橋が政府に伐採のお伺いをたてて井山が伐採された。杉、桧が植林された。

②八風街道　2022.05.14

参加者：吉田和夫、井波、佐原、山田、熊谷、武内、村瀬、西山の8名

朝7時金山駅前に集合。8人で2台に分乗して出発。往きは東名阪が工事中で混むので伊勢湾岸経由で行く。村瀬組の1台は菰野ICから田光を経て八風峠登山口へ、吉田組のもう1台は大安ICから石榑トンネルを経て近江側の登山口へ向かった。

私は伊勢側の村瀬組の旧知の街道を歩いた。田光川に沿う山道を行くと新緑の今は山が一番美しい季節に思う。キャンプ場を過ぎると、小鳥が叫び、飛び交う山奥に入る。全山生命力にあふれている。登山口まで乗り入れて、準備を終え、ヤマップのGPSを作動させてからゆっくりと歩き出す。

当面は林道の廃道のような広いが石ころが多い道が続く。後続が、さっそくヤマヒルが出てきたと騒いでいる。広い山路にふさわしくない鳥居もある。今までなら無関心で通り過ぎたが今回は古道調査なので写真を撮影しておく。結構いくつもの被写体があった。お旅所旧跡なんて今まであったのかと思う。

左手の栗木谷を見ながら歩くがいくつもの砂防堰堤が見える。580m付近で大きな堰堤は終り、そこから右岸に渡り細い山路に入った。この細道にも旧跡があり、撮影していった。何よりも喜ばせたのはシロヤシオの花盛りだったことだ。少しだがシャクナゲの花も見える。足元には岩鏡の小花が咲き乱れている。

天気予報では午前6時からは20％の降雨率で晴れる見込みだったが、登山口から峠までずっと曇りであり、山霧が風に吹かれて流れていく。少し寒いから北からの風であろうか。南に梅雨前線が並び、中国大陸の高気圧が張り出し、北には低気圧がある。鈴鹿山脈は低気圧圏内にあるから北から風が吹き込みやすいのだろう。

久々の八風峠だ。20年ぶりだろうか。記憶にない新しい鳥居が建っている。昔、友人と登ったとき、友人が足元で古銭を拾った。江戸時代のものだったと記憶している。

滋賀県との県境稜線に立つと日本海側の低気圧からの強風で小さな嵐だった。俳句歳時記では青嵐に相当する。登山口から約2時間後の11時に登頂だ。

近江側のパーティを待った。霧と強風で安楽な気がしない。それでも軽い中食と飲み物を飲んで休んだ。峠周辺はシロヤシオの林であった。待っても中々来ないから大声でコールして見た。くる気配はしなかった。1時間後に道中で会うことにして下山を開始した。

県境から鞍部に下ると八風谷の道標があった。ここはもの凄く寒かった。こここそ本当の峠（鞍部）なので風を集めるからだ。合羽を着こんで置いて良かった。誰かが低体温症になるぞ、と警告している。

以下次号に続く

山 書 蒐 集 夜 話（その1）

支部員　安藤忠夫

はじめに

本年４月、「亀の会」の恒例山行に参加した折、ある程度の古参会員であることもあって、さる方より「何か置き土産を」と支部報への執筆依頼を受けました。で、意を決して、日頃から親しんでいる山の本の蒐集に纏わる、秘話、悲哀話を記してみることにしました。

表題を「山書蒐集夜話」などとしましたが、もとより特に目を惹くような話題ではありません。ただ、長年にわたって山の本の蒐集に努めてきたこともあって、世間一般では通りそうもないような珍現象が生じたり、仲間内での駆け引きや、化かし合い、などなど折にふれて見てきました。何と云っても、蒐書家仲間の世界！　オタク族、いわゆる魑魅魍魎が蠢いていることも事実でしょう。とは云っても、山の本に関心を寄せている人達ですから、根は善良で、山登りを趣味としている人達であることに変わりありません。

なおここで取り上げる話題の多くは、はるか昔々のことでもありますので、かつて綴った作文の二番煎じでしかありません。また、本来ならばＡさん、Ｂさん、Ｔ書店とするところですが、ご迷惑をかけない範囲で、あえて実名で記しておきます。

買えなかった山の本

山登りと山の本の蒐集は、私の山人生の両輪とも云えるものです。登山は60年、山の本の蒐集も50年をゆうに超えてしまいました。中で、山関係の本集め、さらに云えば山書の特装限定本の蒐集は、費用が嵩むこともあって、私のような一介の勤め人でしかなかった輩が手出しする分野ではない。が、それでも長年の間に、けっこうな冊数を蒐めてきた。常に分相応を心がけてきたつもりだが、にもかかわらず、随分無理をしたこと再々。しかしながら、これまで大きな綻びなく、どうにか今日までやってこられた。有りがたいことである。

小林義正著『山と書物』普及本

特装本・限定本と云っても千差万別で、古書・稀覯本には手を出さず、もっぱら新刊ものばかりを追ってきた。だが時には、ふらふらと評価が定まっている高価なものに手出しをしたこともありました。その一つに、小林義正著『山と書物』愛蔵版があって、今もって甘酸っぱい想いが残っている。この道を行く者が大なり小なり味わう、本集め人の悲哀話ではないだろうか。

では、話を進めるために、次の草稿をお目にかける。1992年に「買えなかった山の本」と題して、さる山の本に載せたものである。

*

昨秋のある日、日頃から懇意にしていただいている蒐書家の富田記一さん（多治見市在住）から電話をいただいた。「大阪の浪速書林から古書目録が送られてきたが、その中に小林義正著『山と書物』の揃いが120万円とでている。20 数年ぶりに揃いで売りにでたから、買っておいたらどうか」というものだった。

愛蔵版である。正編11部、続編27部というもの。もっとも一説には、○番と記されたものもあるようだから、12 組の正続揃いがあるかもしれない。いずれにしても稀覯本であることは万人が認めるところ。目録には、まったくの極美完本、と記されているとのことだった。

富田さんご自身は、本書を既に所蔵されておられるから、重複して購入する必要はない。が、できれば身近な知人が入手しておくべき、と思われたようだった。

連絡をいただいたものの、消費税を加え、し

めて 123 万 6000 円といえば大金である。いくら値うちだからといっても、おいそれと手だしできる金額ではない。一生に一度ぐらいは所蔵するのも悪くはないが、所詮は高嶺の花。それ以上には詮索しないでおくつもりだった。

その夜、わが家では夕食後のひととき、いつものように団欒の時をもった。世間話のついでに、わがヤマノカミに富田さんから電話をいただいたことを話した。いくらか自重気味に『山と書物』愛蔵版の位置づけ、蒐書家たちの執心の本であること、著者の人となりとこの人の蔵書の行方、などについても説いた。ついでに、われわれ一般人には縁のない山書で、今後売りにでることは稀だろう、とも言いそえた。

ところがわが家のヤマノカミはいくらかの思案の後に、意外なご託宣をとなえるのである。「買ってもいいわよ。お金は何とかなるのだから」と。

本気かいな？　……。私は、一瞬、ヤマノカミの気がふれたのではないか、と顔をまじまじと見詰めた。日ごろから楽天家だということを感じてはいたが、今回ばかりは言いだした私の方が面食らうほどに、いともたやすく宣うのである。

だが、翌日になっても決断できない。

私は長年にわたって山の本を集めてきた。特装本にも興味を抱いている。だが、山書の蒐集といっても、集めたものは世間から見ればガラクタ同然。たとえ『山と書物』の愛蔵版が垂涎の山書といっても、正続二冊に 100 万円を越えるお金をつぎ込むなどとは、後々まで好事家のそしりを免れそうにない、分不相応だろう、と思った。

一方、わがヤマノカミは、購入をためらうダンナを見て「電話をしなさいよ。早く注文しないと、買えなくなりますよ」と、ときおり言う。

どうしても決心できない。わが家には高校三年生を頭に育ち盛りの子供が三人。これから出費がかさむことが目に見えている。いまさら一銭たりとも浪費ができる余裕はないのである。

それからは、買うことを諦めるのは当然だ、という気持ちと、この機会を逃せばもう入手できないだろう、という思いがあい半ばして、悶々と思い悩むことしきりであった。

ところが、次第しだいに、所蔵してみたい、購入してもいいではないか、という思いに傾斜

小林義正著『山と書物』愛蔵版　正・続
右・正編 11 部本　左・続編 27 部本

して行くことに抗いきれないのである。やがて、いざとなれば再び人手に渡せばいいのではないか、との思いに至るまでになっていた。

最初の電話があって 3 日目の日曜日、富田さんは「購入を見送るのはいかにも惜しい。これから目録を持ってそちらへ行く」と言われ、わが家へ来られることになった。この頃になるとすでに私の腹も固まっていて、ご到着と同時に注文の電話を入れた。

結末は簡単だった。既に売れていた。

しまった、最初に連絡をいただいた時、なぜ注文をださなかったのか、と悔いることしきりである。釣り落とした魚はあまりにも大きいのだ。わが習性とはいえ、決断の遅さ、を嘆くこと大なるものがあった。だが、その一方で、『山と書物』愛蔵版を購めることができなかったことで、何かホッとする気分がしたことも記さねばならないだろう。

*

と云うものである。じつはこれには後日談がある。

人生は異なもの。その後、いくらも経たない日のこと、ある集まりの酒席で、「……、あの浪速書林の本はねぇ、ぼくが買ったんですよ」と云われる方が現れた。同じ山書好きの五十畑俊夫さん(東京都墨田区在住)で、その時私は、どう応え、どのように繕ったか覚えていない。まさかと思う一方で、この世界も案外狭いものであることを悟った。

買えなかったが、当時の私の心境は先に記し

小林義正著『山と書物』愛蔵版にある識語

た通りである。と同時に、これで総てが終わったつもりでいた。本書のオリジナル普及本と復刻本の２点を蔵していたからである。

ところが、2012 年夏、ある紙誌に「お譲りください」として以下が載った。「小林義正著『山と書物』正続愛蔵本、田部重治著『わが山旅五十年』限定本、極美完本を希望。何としても 60 歳代で念願を果たしたく、奔走中です」とあった。

五十畑さんである。私が購入に走りながら、あと一歩で先を越されてしまった方。何故に再び購う必要があるのだろうか、ひょっとすると人違いではないか、と思った。あれ以来、ずっと大切に保管されていると思い込んでいたのだから、この記事の意味することが解せないでいた。

五十畑さんは山の本蒐書歴 30 年である。財力があり、地の利を生かして主だった古書市のあった日は、必ず、懇意の店に出向いて、めぼしいものを手当たり次第に引き抜いてくると言われる。そんな折り、前述の『山と書物』に出逢われたようだった。

そうこうするうち、当の五十畑さんから手紙をいただいた。それによると、あれから 5 年ほど経った時、不況の最中に会社を辞めることになってしまい、子供たちの学資工面のために、断腸の思いで蒐集した山書のすべてを手放した。本とは一切縁を切る積もりだった。しかし、相変わらず送られてくる古書店からの目録に、今度は『氷河と萬年雪の山』特刷本が載り、その魅力に抗し難く、再度山書蒐集にのめり込んで行ったとあった。

そしてさらに、再び『山と書物』愛蔵版（正続揃い、5 番本）を手に入れて、溜飲をおろしてホッとした矢先、「しかし、好事魔多し。歓喜の翌年平成 18 年に大病を患い入院。一時に大金が必要となり、おまけに、入院中に借金してまで山書を購入していたことがヤマノカミにバレてしまい、売却を迫られました。勿論抗弁不可能です」とあった。

結局、再び蒐めた山書を処分された。そして、性懲りもなく今回 3 回目の蒐集を始められたようだ。

第三者から見れば狂気の沙汰に思えるだろう。執念一途、ここまでくれば立派なもの。だがこのこと、蒐書家の性が見え隠れしていて、私などはその心持ちが痛いほど判るのである。男と云うのは一旦思い込むと、猪突猛進、脇目も振らず突っ走る傾向があるのではないだろうか。と評しても、あながち的外れではない気がする。五十畑さんご本人は、2012 年時点で 65 歳、山書購入資金捻出のために 70 歳まで働くと張り切っておられた。と云うことで、先の「お譲りください」の記事に繋がったわけです。

本書を繞って、私はある種の感慨にふけっている。

縁と云うのは不思議なもの。求める者には与えられるもののようで、時移った今では私も所蔵するところとなった。一方、件の五十畑さんは、ただ今奮戦中である。3 度目の正直、やがて手に取ることができるのではないだろうか。

登山者、さらに個々の人生も同じだと思うのだが、山書だって、もって生まれた星のようなものがあるのではないだろうか。

・小林義正著『山と書物』愛蔵版、限定 11 部、昭和 33 年 5 月、築地書館刊、A5、361 頁＋21 頁、署名、差し箱、頒価 4800 円

・小林義正著『続・山と書物』愛蔵版、限定 27 部、昭和 35 年 5 月、築地書館刊、A5、　401 頁＋22 頁、天金、署名、差し箱、頒価 4400 円

筆者：安藤忠夫氏のプロフィール

1943年3月、愛知県に生まれる。愛知県立高校に約40年間勤務。会員番号7333　永年会員
1991年より支部常務委員で、1993年～95年4月まで支部報編集長を務める。
日本山書の会会員
・著書『奥美濃がたり』『安曇野だより』、画集『山を描いて』など多数。
・東海支部関連編集書『名古屋からの山なみ』『名古屋周辺　山旅徹底ガイド』『続　名古屋周辺　山旅徹底ガイド』『東海山岳６号』『東海山岳７号』『東海山岳８号』
・山書の会では、運営の要としてご活躍である。
・その蔵書の数、約7000冊で、今や山書の蒐集と研究では、日本では右に出る者がいない存在である。

今号から連載をお願いした。乞うご期待！

（編集委員会）

東海支部の蔵書からの一冊㉜

図書委員会委員長　**石田文男**

『近代日本登山史』　著者：安川茂雄

《山好きにとっては、山を攀じ漂泊することはこのうえもない悦楽に違いないのだが、同時に又下界にあって山の愉しみを味わうことの舌ざわりは格別といえる。つまりママリーがいみじくも言ったが、〈山好きは早晩期するところは執筆狂たらざるえない〉と喝破したものだ。山を遊びや趣味と眺めようともスポーツとみようともそのことは自由であるが、山好きに共通した性癖として執筆癖と読書癖があり・・・》（補稿近代日本登山史 - 終章・8：山岳図書の新たな展望より）。この一文に引かれてこの書をとり上げた。以前には『新稿－日本登山史』を紹介しているが、史実は同じであっても著者の特徴がそれぞれに顕れていて、どちらも引き込まれるように読めるからおもしろい。

目次は「第一章：開化前後の山と人」から「第二章：近代登山の黎明」「第三章：ウェストンの来日と志賀重昂『日本風景論』の刊行」「第四章：山岳会創立の前後」・・・「終章：昭和三、四十年代と海外登山」（十六）と続き、付記、あとがき、近代登山史略年表、人名索引となっていて、どこを見開いても興味尽きない。

ちなみに、「大井川田代山奥横断と荻野音松」（第五章：縦走登山の全盛時代・3所収）を一気に読んだ。『山岳』第三号の「日本アルプスの巻」の巻頭にこの荻野の「駿州田代山奥横断記」が掲載された。この記録は明治39年8月、大井川上流の赤石山脈秘奥の探検ともいうべきもの、日本人の記録としては河野齢蔵（明治37年7月）、小島烏水（明治38年7月）ぐらいしかなかった時代のことで、まさしく壮挙とも言われた山行だった。その年の秋、横浜の小島烏水宅を訪問して、田代奥山や秩父の国師岳などについて夕食を共にしながら語り、烏水を大いに刺激したという。

「日本人の自然と山岳観」（終章・6）には《小稿は・・・あらかたの輪郭をもって近代日本における山と人の結びつきを記し、・・・

さらに山岳会設立前後に稿をすすめた。こういった近代登山へのアプローチを含め、日本人の山岳観、自然観といった伝統や実相について、・・・もういちど筆者なりに考察してみたい》とある。以下は少し長いが代弁として引用したい。読者に興味深く受けてもらえると確信したい。

《それにつけてもじつに日本人は山好きな国民性であると思うのだが、日本人はなぜ、かくまで山を愛するのか？。この素朴な命題は、日本アルピニズムの形成上において重要な課題である。つまり日本人のアルピニズムは単に欧州からの輸入によって発生し育成されたとは信じがたいからである。日本人の民族性そのものに山や自然を愛する素質が潜在的に秘められていた・・・、『万葉集』その他の日本民族のもつ文芸的志向にもその愛執は色濃くにじみ表現されている。・・・自然とそれをめぐる豊かな季節感と日本人の結びつきは、あまりに克明であり濃密である。

・・・一部の高山深谷を除いては日本の山は大なり小なり人間くさい。・・・だからこそ日本山岳会の早期会員たちの多く、たとえば武田久吉、田部重治といった元老の人々は、アルピニズムを否定し〈登山は山旅である〉とみるのである。それはしごく当然の態度というべきで、そのような日本アルピニズムの基調をアナクロニズム、あるいは老人くさい・・・過小評価してはならない。

・・・そこでふたたび命題に戻す。かくま

で日本人は、なぜ山が好きであるのか--山を登るというだけの単純な行為の中に日本人の根源的に抱いている無常観、生命観をさがしてみたい。いささか古くさいが円空、播隆，木食といった人々の動静は何としても気になる。ザイル、ハーケン、アブミを使用するしないではなく、その対自然の日本人の精神の高みを黙視して日本のアルピニズムの考究はありえないのではないか。

登山には人それぞれの個性があってよいと思う。登山とはかくあるべきというのは、多分に独善となりがちだ。・・・いわば個人の澄明な欲求であり、意志的行為であろう。・・・つまるところアルピニズムの精髄は、自己の生命力の根源につらなるもので、下界的な虚飾とは無縁な存在であろう。まず自己の山への信奉を確信するところから、アルピニズムの道はひらけるのではないか。ときにそれは沈黙の情熱であろう。・・・唯一自己の信ずる山を胸底ふかく誇りたかく抱くことが、正統なアルピニズム発見の手がかりとなるのだ。日本にも多くの歴史がある》。

終わりに《・・・それらの中においても、登山の歴史をもっとも美しく崇高なものの一つと私は確信しつつ、小稿を閉じたいとおもうのである》と結んでいる。

半世紀経った本で古めかしいと思われるかもしれないが、A5判567頁の量で史上を正確に把握するうえで座右の一著であろう。この後、今に至る50年余これに匹敵する記録集は知らない。『ヒマラヤの高峰』（全5巻白水社新版1983年）、元版の1965年以後の著しい記録の補遺を行ったもの。他に『登山史の発掘』『登山史の周辺』など注視したいが、いずれも30数年経っている。今やそれを纏める人材の希薄か、はたまた読書観の離反か。残念ながら増補版は支部の書架に無い。

菊判567頁
発行：1969年6月
発行所：あかね書房

TOPICS

夏山フェスタ講師来訪！！

6 月 11 日・12 日の両日、恒例の第 8 回夏山フェスタが、ウインクあいちで開催されました。恒例といってもコロナ禍で 3 年振りの開催となりました。両日とも開催を待ち侘びた夏山ファンで賑わっていました。今回も例年のごとく東海支部のブースに、セミナー担当の著名な講師の方々が訪れてくれました。尚、紙面の都合により詳細は、次号に掲載します。（編集委員会）

中央　田中陽希さん　右　かほさん

6 月 11 日（土）

中央 吉田 類さん

6 月 12 日（日）

中央 石丸謙二郎さん　右 大矢康裕さん

春の３つのボランティア登山 揃って復活

ボランティア委員会委員長　**前田隆久**

３つの委員会公式行事、春のブラインド登山（視覚障がい者登山）、 SON・愛知「山岳会といっしょにに登山」(知的障がい者登山)、春のタンポポ登山（補導委託登山）は、2019年秋のブラインド登山以降、新型コロナ禍のため休止が続いていたが、ウィズコロナの時代を迎え感染症対策に留意して、この春揃って復活した。

３つの行事とも交通手段、バスの定員等の制限と、完全に新型コロナが収束していない事もあり、ブラインド登山者、アスリート（知的障がい登山者）、試験観察中の少年の参加は例年に比べかなり少なかった。その分支援体制が充実した登山となり、３登山とも天候にも恵まれ無事終了した。

春のブラインド登山

春のブラインド登山

5月8日（土）三河吉祥山の、ふれあいの森駐車場からの往復コースで、ブラインド登山者7名、東海支部員22名の総勢29名で、密を避けるため大型福祉バスとマイクロバスの２台に分乗して行った。今回は東海ユースからも7名の参加があつた。今後もこのような他委員会とのコラボを継続し、ブラインド登山の裾野を拡げいていきたい。

三河吉祥山にて

SON・愛知「山岳会と一緒に登山」

5月28日（土）宮路山、五井山へ名電赤坂駅からの往復コースを歩いた。アスリート7名、SON （スペシャルオリンピックス日本・愛知）から10名、東海支部員15名の総勢32名で、SONからのコロナ対策上の要望もあり、公共交通機関を使っての登山となった。標高差こそ無いものの、駅からだと歩行距離の長いコースだが、アスリートを含め32名元気に全員無事完登した。

五井山にて　SON・愛知「山岳会と一緒に登山」

タンポポ登山

6月4日（土）猿投山で、試験観察中の少年1名に対して、家庭裁判所から２名、家庭裁判所友の会から2名、東海支部員６名の総勢11名で行われた。やまじの森林道ゲートから東海自然歩道で猿投山を目指し、演習林尾根でゲートに戻るコースで行った。6月とはいえ、爽やかな風が吹き渡る登山日和で、少年の笑顔が印象的だった。

ブラインド登山者も、アスリートも、試験観察中の少年も、私たちも、山に入れば登山を楽しむ同じ山仲間。今回も、楽しい登山だった。

委員会行事が新型コロナで中断していたため、久しぶりの３つのボランティア登山の揃い踏みであった。特にSONとの登山は今回20回目を迎え、20年以上続けてきた年月の重みを感じた。秋のシーズンに向け、ひまわり登山（支部員視覚障がい者登山）を重ねながら、準備を進めていきたい。秋には、大分での視覚障害者全国交流登山大会も予定されている。

会員の広場

同好会コーナー

スケッチクラブ　　岩田智与子

鶴舞公園

4月13日（水）、今年度最初のスケッチ会は、鶴舞公園で6名が参加。コロナ禍で中止・変更の後、久し振りのスケッチ会となりました。

桜は終わり、バラにはまだ早い時期でしたが、噴水や奏楽堂、名大病院等思い思いの場所を選んで描きました。暑い日だったので木陰を探すなど、工夫しながらのスケッチとなりました。

最後に描いた絵を鑑賞し合い、それぞれの絵に個性を感じることが出来ました。

桑名市・六華苑

六華苑・庭園から本館を望む

6月3日（金）、桑名市の名所、六華苑・諸戸氏庭園・桑名宿七里の渡跡でのスケッチで、9名が参加しました。３か所は近い場所にあるので、それぞれ好きな場所に行ってスケッチをしました。

諸戸氏庭園は春の一般公開がされており、様々な種類・色の菖蒲が見事でした。六華苑は、鹿鳴館の設計で有名なジョサイア・コンドルが手がけ、地方に残る唯一の建物で、洋館・日本庭園など絵に描きたいと思う場所が沢山あり素晴らしい場所でした。

レストラン Rocca での懇親会

煉瓦の蔵や塀、藤棚の影、上から見た屋根、広々とした渡し跡、趣のある門などそれぞれの感性が動かされたものを描くことが出来ました。

昼食は六華苑に隣接するレストランRoccaで懇親会を兼ねて取りましたが、その後時間のある方は、引き続き六華苑でスケッチを行い、有意義なスケッチ会となりました。

第8回作品展

8回目の作品展は、11月9日（水）～13日（日）の5日間、前回と同じ名古屋市の市政資料館・第5展示室で開催します。山の絵の他、スケッチ旅行などでの多彩な作品を展示してお待ちします。

東海支部の皆さんには、毎回大勢訪れて頂きますので、どうか知人の方々をお誘いの上是非ご覧頂きたく、ご案内させて頂きます。

代　表…石井　仁

事務局…村中征也・岩田智与子

登山用具あれこれ④

雨具を着て行動するときに

装備委員会委員長　千葉泰丈

北海道のトムラウシ山と言えば百名山として登山者の多くの人にあこがれの山の一つと言えるかもしれません。そのトムラウシ山は近年まれにみる多数の死者を出した惨事を起こした山として、さらに知名度を高めてしまった山でもあります。

7月の半ばという暑い季節にも関わらず、登山者 8 名が低体温症で死亡した事故であります。この遭難事故は気象遭難に分類されるものでありますが、ツアー会社の経済優先の圧迫が多くの判断ミスを生んでしまった側面と、さらにガイドとそしてツアー客の低体温症に対する認識不足が招いた死亡事故ともいえます。ツアー会社に関しては、言葉上では安全優先であったようではありますが。しかしながらこのツアーの、ガイド 3 人を含めた 18 人のうちツアー客の 5 名が自力で下山して生還したのも事実であります。この生死を分けた要素は何であるのか？登山装備の面から考えてみたいと思います。

百名山のトムラウシ山に登りたいと思う登山者ばかりなので、雨具はゴアテックスの雨具で最高レベルの性能を有している雨具を着ていたのではないかと思われます。

そのゴアテックスの性能とは、水圧に耐えて水を侵入させない力は５０ｍの水圧。蒸気を通す能力を示す透湿性については 24 時間当たり１ｍ四方の面積の生地で２５ℓから７８ℓの蒸気を通すとされています。実際には耐水圧で２０ｍの水圧に耐えられれば十分な性能を有しているとされています。ちなみに水圧１ｍ～１．５ｍの水圧の雨の中というのは痛くて立っていられない状況です。２０ｍの水圧が有れば十分な性能が有ると言えます。ゴアテックスはさらにその倍以上の水圧に耐えられる性能が有ります。透湿性に関しても同様なことが言えるようです。ただ認識の不足によってゴアテックスの本来の透湿性が発揮されない場合もありうる様です。

メンテナンスが充分ではなくて表面の撥水性が低下している場合などによって透湿性が悪くなり蒸気が雨具の中で水に変わりそれによって着ていたものが濡れてしまう等が起こります。

ウェアーが濡れれば体温が急速に奪われていきます。濡れたウェアーは乾いているウェアーの２５倍の速度で体温を奪っていくと言われています。ウェアーが乾いた状態でないと快適でないといえるばかりか、過酷な状況では生命維持に危険が迫っているとも言えます。

透湿性能が良いゴアテックスの雨具を着るのはもちろんのことですが、最初に与えられている撥水性能を維持するためにメンテナンスをしなければなりません。

北海道の 2000ｍクラスの稜線は本州の 3000ｍの稜線の厳しさに匹敵します。7月の半ばとはいえその時の状況は気温８℃～１０℃、風速は２０～２５ｍ/秒であったとされ、体感温度は氷点下を下回っていたと考えられます。真夏でも 3000ｍの稜線では低体温症を引き起こすことが有ると考えられます。

トムラウシ山事故の生還者の一人は、雨具の中で濡れてしまったフリースを着ることをしないでタオルに穴をあけて頭からかぶることによって自分の命を救うことが出来たと証言しています。保温に努めたことを意味しています。

多くの場合これほどひどい状況にならないとしてもゴアテックスを着て雨の中を数時間（たとえば半日）行動したとしたら雨具の中にもう１枚ウェアーを着て、体温維持に努めることを心の中にとどめておきたい。

会員の広場

随想

回想の登頂記 ③ キリマンジャロ

支部員　杉浦吉治

2001年9月8日午前６時45分、ついにアフリカ大陸最高峰キリマンジャロの頂上ウフル・ピーク(5,895m)に妻ともども到達した。薄い空気に悩まされた苦しい登高だったが、頂上は360度何も遮るもののない眺望は達成感とともに実に爽快だ。

＊

今回は、一昨年のモン・ブラン、昨年のマッターホルンに続いて連続の海外高所登山である。登頂にあたり、難所や危険なルートはないということで、あまり緊張感はなかった。

しかし、赤道直下に近いタンザニアとはいえ、高度が5,000mを超すだけに高所順応に失敗すると命取りになる、という情報を得ていたので、今までどおり出発前に富士山でゆっくり時間をかけてお鉢巡りをしておいた。

成田～ムンバイ～ナイロビ～タンザニア～登山口・マラングゲート～最上部のキボハット

成田からインドのムンバイ（泊）経由で、ケニアの首都ナイロビ（泊）、タンザニアのキリマンジャロ山麓のモメラ（泊）を経て、キリマンジャロ登山のマラング・ゲート(1,800m)で登山手続きを済ませていよいよ登山開始。

ジャイアント・セネシオ(3,720m地点)

富士山のお鉢巡りをしておいたためか、マンダラハット(2,727m)からホロンボハット(3,720m)まではまったく高山病の症状は出なかった。

ところが、最後のロッジ・キボハット(4,703m)へ到着してから、寒さのためか頭痛に悩まされて夕食は完食できなかった。

登頂当日

そのため短い仮眠となり、軽食をすませて9月8日午前0時、毛糸の帽子や防寒着で身を包み最上部の小屋キボハットを出発。

ほぼ赤道直下の9月とはいうものの、標高が5,000mを越す地点は気温が低く、ザレ場のジグザグの急な道の登行は大変厳しかった。

5,000m以上からは非常に苦しい登行の連続

標高が5,000mを超えるような高峰は、どれだけ経験を積んだ頑強な登山者でも、そのときの体調が万全でないと登頂することが出来ないといわれている。

午前2時半頃、ハンズ・メイヤー・ケイブ（5,150m）で小休止。酸素濃度が低いため頭痛が激しく「苦しい」の一言。水分をしっかり摂り、大きく深呼吸をして体内へ酸素を送り込む。参加者の中には、私より年長者が数人いたが、みなキボハットから上は大変苦戦を強いられ、高齢者で登頂できたのは2名のみと聞いている。

先に記したように、これまで海外の高所登山をするときは、事前に富士山のお鉢巡りをして、心身ともに高所順応をして成功してきた。しかし、さすがに5,000m以上は応えた。同行のTさんは2回目のチャレンジ。前回は現地ガイドに遅れてはならぬ、とぴったり付いていって失敗したので、今回は自分たちのペースで登りましょう、と声を掛けてくれた。そのペースとは、深呼吸しながらゆっくりと１歩ずつ登り、50歩進んだらそこで立ち止まり大きく深呼吸を10回。これを繰り返して、予定より早い午前5時頃火口縁の頂上ギルマンズ・ポイント(5,682m)に到達した。ここもキリマンジャロのひとつのピークであるから、ここで引き返す登山者も多いということだ、が私たちは折角ここまで来たのだからもう一息頑張ろう、と登行を続けた。

夢のような光景に感動！

ここから20分ほど登ると空がうっすらと明るくなってきた。やがて前方に夢のような美しいディッケン氷河が見えてきた。ここで撮影し

朝日に輝く頂上近くのディッケン氷河

なくてはと思い、日の出前から6×4.5判ポジカメラとサブカメラの35mm判ポジカメラとネガカメラを取り出して深呼吸を忘れずに夢中でシャッターを切り続けた。しかし、すぐに肝心の6×4.5判カメラはシャッターが作動しなくなった。低温のためバッテリーが機能しなくなったのだ。やむを得ず2台の35mm判カメラで慎重にシャッターを切った。

マウェンジ峰(5,150m)

やがて、眼下のキリマンジャロの1つの峰であるマウェンジ峰(5,150m)に朝光が差し込んできた。その最高峰ハンス・メイヤー・ピークは荒々しくも絵になるが、ゆっくりと時間は取れないので先へ進んだ。

最高峰ウフル・ピーク(5,895m)へ

ここから比較的登りやすい登山道を約1時間半進むと、午前6時45分、待望のキリマンジャロ・キボ峰最高地点ウフル・ピーク(5,895m、「ウフル」とは「自由」、「独立」の意)へ妻ともども到達した。気温はマイナス15℃。仲間たちは少し遅れているようだ。先に着いていた現地ガイドのトーマス君と記念撮影。

風もない穏やかな頂上、360度遮るものが何もない大パノラマが広がっていた。ここがアフリカ大陸の最高地点、と思うと感慨ひとしおだ。E・ヘミングウェイの「キリマンジャロの雪」ならぬ氷河を撮影する。南側に聳えるサウザ

最高峰ウフル・ピークにて

ン・アイスフィールド（氷河）の高さは60メートル以上もあるという。ザックに収めておいた6×4.5判カメラは未だにシャッターは切れず、やむを得ず35mm判ポジカメラでストックを三脚代わりにして、慎重に撮影した。

下山は登りと同じルートを下る。下るほどに空気が濃くなり足取りは軽い。キボハットで小

頂上直下のサウザン・アイスフィールド

休止した後、本日の宿泊地ホロンボハット(3,720m)へは午後２時頃に無事到着した。翌9日、親切なポーター達の案内で珍しい花々の撮影を楽しみながら、マンダラ・ハットを経由して、登山口のマラング・ゲートへ予定通り到着した。

ここで現地登山ガイド達と別れ、山麓の町アルーシャで1泊。ここからも往路と同じルートを経由して帰国した（帰路は関空へ）。

余談として

地球温暖化で頂上の氷河が後退していると聞いていたが、こうして眺めた氷河は見事なものであった。しかし、下山後アルーシャのホテルで購入した写真集(1982年刊)の氷河を見ると、今回見てきたものよりもはるかに豊かで、なるほどこれが20年以上前のキリマンジャロの氷河かと納得した。とともに、やがて見られなくなると思うと非常に残念だ。

なお、山名の「キリマンジャロ」は、西のシラー峰(3,962m)、主峰のキボ峰、東のマウェンジ峰の3峰を合わせての総称で、スワヒリ語で「白い山」、または「輝く山」の意とのこと。1848年にヨーロッパ人として最初に山頂付近の雪を望見したドイツ人宣教師ジョン・レブマンは、氷河の退化を知ったら悲しむであろう。さらに、初登頂をした(1889年)ドイツの地理学者ハンス・メイアーも残念がるのではなかろうか？

登山中、現地ガイドやポーター達はみな私たちに大変親切であった。その理由をリーダーに訊いてみたところ、欧米人の言動は表向きと異なり、陰で現地人達を軽蔑した会話を交わしているのをよく耳にしている、ということだ。彼らは仲間との会話は現地語のスワヒリ語で話しているが、仕事柄英語もよく出来るので欧米人同士の会話はみな解ってしまう。これに対して、日本人はみな優しく彼らに感謝の気持ちをもって接しているから、彼らからも親切にされる、ということだ。こんなところまできて人種差別をあらわにしているのか、と思うと残念でならなかった。

＊

ところで、今回の山行の帰路、決して忘れられないことが起きた。9月10日朝、アルーシャ（タンザニア）から車でナイロビ（ケニア）を夕刻の便で発ち、翌11日早朝ムンバイ着、ホテルで休憩した後、午前中はインド門、博物館などの市内観光を楽しんだ。ここまではよかった。その後ムンバイ空港から香港経由で関空へ向かう予定だった。ところが、チェックインまではよかったが、その後なかなか搭乗できなかったのだ。相当長時間待たされてやっと搭乗手続きが始まったかと思いきや、なんと数メートル進むごとに搭乗券のチェックを5回も受けた。

関空に到着して分かったことだが、私達がムンバイを発つ前の2001年9月11日、NYであの忌まわしい同時多発テロ事件が起きたのだ。帰宅後、旅装を解くのもそこそこでTV画面にクギ付けになった。ということで、今回の山行は、天国と地獄を見た思いであった。

参考文献：『コンサイス外国山名辞典』
吉沢一郎 監修、三省堂編集所 編

なお、編集委員会より前号169号の「回想の登頂記②」でP15のマッターホルンの写真キャプションを訂正します。

「この角度からの眺めが最も美しい(ルートは右のヘルンリ稜)」は誤りで、

「この角度からの眺めが最も美しい」に訂正します。

委員会報告

東海支部が取り組む「若手育成」

東海支部は1961年(昭和36年)4月に設立、設立当初は東海地区からヒマラヤに登山隊を派遣する受け皿として、日本山岳会の支部をこの地域に設置することが望まれ設立に至った。以来その伝統が脈々と受け継がれ、頻繁に登山隊を海外に派遣する事となった。

マカルー東陵をはじめ、ガウリサンカール南峰登頂、ウルタルⅡ峰初登頂、K2西壁初登攀、ローツェ南壁初登攀など、世界の登山史に数々の功績を残していった事は周知のことであります。

そんな東海支部を支えるのは、若い人たちの結束したパワーであり、登山はスポーツであり、世界の登山史に刻むようなパフォーマンスを行えるのは、実力のある登山者であります。しっかりとした若手育成が、東海支部の責務であり、東海支部が継続して取り組んできている若手育成の取り組みを紹介する。

現在東海支部には、20代の若者を主力として擁する事のできる組織が、

・青年部
・東海ユース
・東海学生山岳連盟

である。

青年部は、故小川繁氏と瀧根正幹氏が提唱し瀧根氏を初代委員長とし 1998 年に設立されました。目的は、東海支部内の若い人たちの技術向上の為であります。カナディアンロッキー登攀や、ロブジェイーストの登攀などをはじめ、国内外で積極的な登山を志し発足。その後、私に引き継がれ、青年部として精力的な登攀を含む登山を含め、活発な登山を実施してきた。
最近は、キノコ山行や交流事業など、荒木委員長の元活動の幅も広がり、興味深い活動は注視にあたる。

東海ユースは、朝日、中日文化センターなどの登山教室をはじめ、ビギナーな登山から始める登山者の卒業後の受け皿の集まりとして、山田明美前副支部長が提唱し、発足した。女性登山者が多く、登山のスタイルも青年部と対比して、ビギナー志向が強く活動を行っている。

東海学生山岳連盟は、昭和 44 年、愛知学生山岳連盟が大きくなり、愛知・岐阜・三重・静岡の大学山岳部の連盟として設立された。しかし、大学山岳部の減少とともに、平成 10 年ごろ自然消滅、再度平成 21 年（2009 年）11 月南山アルパインクラブの山田利行君が初代委員長で東海支部の傘下として再設立された。
関東の学生部（各大学が大学山岳部単位で加入）スタイルと違い連盟自体が日本山岳会に加入しているので、日本山岳会の会費負担が一団体分（12000 円）で良く、連盟に加盟している大学は支部員と同格の権利を有する為、大学のサークルや同好会、個人まで様々な山好きなメンバーが集まっている。

課題

青年部：アルパイン志向を目指すものが集まってくれたが、クライマーには帰属意識が低く、東海支部青年部というより、青年部山岳会とでも言おうか、青年部を単一組織として考えている人が多く、また若者ゆえ日本山岳会と東海支部費の会費負担が高く、3 年未納でやめる（除名）する人が続出した。

東海ユース：女性中心の組織ではあるが、組織としては非常にしっかりしており、逆に青年部の緩い組織間とは相反して、水と油のような状態である。登山学校、文化センターの卒業生が主となっている為、自主的な山行というよりみんなで集合し行うような、ツアー的な山行が中心である。

東海学生山岳連盟：大学山岳部 0、ワンゲル 1、山サークル数部、幽霊大学数部の状態である。大学直轄の体育会系のような存在は数少なく、同行会、サークル、研究会の様な組織であり、勧誘方法も今は昔 Twitter や Instagram など SNS で勧誘する時代であり、真剣に学生生活を山に打ち込む学生が、激減したのも原因である。ルームに入りきらなかったくらいの総会も、最近は 4 人になってしまい、存続すら危ない状態である。

いずれも、東海支部の若者の活動を支える重要な組織であるが、それぞれの団体がうまく機能されていないのが現状である。学生山岳連盟の卒業生は、青年部に入りやすくするために、組織として青年部の傘下にしてあるが、うまく機能していない。青年部とユースの交流会も定期的に行いたいが、双方の垣根はなかなか埋まらない。

このように、東海支部は若者育成に向け、取り組みを行っているが、若者をはじめ、山岳会的組織に集うためには、かなりの工夫とそれに対する組織の理解が必要ではないであろうか。

例えば東海支部は未だにメールでの配信が多く、SNS は全く活用されていない。一方若者は、SNS や Line でのコミュニケーションが常で、温度差を感じる。

委員会が多いのも良くもあり悪くもある。現在東海支部は 20 ほどの委員会があり、各委員会が熱心に活躍しているが、委員会ごとにおらがグループ意識が強く、例えば青年部は、自身の集まり以外では活動の方法が分からない感がある。おそらくほかの委員会や同好会でも同じで、各委員会の組織を打破する事が重要ではないだろうか。

コロナ渦で、活動、交流も鈍化した感があるが、今後交流企画も増やし、組織を再編し活動を活性化する事が重要である。今津、服田の副支部長の若返りも力になっている。大学山岳部・ワンゲル出身の彼らの危機感の共有は、長年孤軍奮闘の私にとってはありがたい限りである。

もう一つ、東海支部の核となる組織を構築していきたい。アルパインクライミングをきちんと活動の主とする組織である。次世代のヒマラヤニストを輩出する事はもちろん、社会人山岳会が行っている、ロープを使ったクライミング山行を定期的に行える組織である。

ヒマラヤを目指した創始の志を忘れない為にも、東海支部にはそんな集団が必要ではないだろうか。私の模索と挑戦はまだまだ続きそうである。　　支部長　高橋玲司

山行委員会だより

●山行委員長退任にあたり

このたび７年間にわたる山行委員長を退任することになりました。この間支部員並びに支部友会員の皆様には、山行委員会の活動に対してご支援・ご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

私が委員長を拝命した頃より、それまでの支部山行の在り方についての議論が盛んになり、今ではツアー的な山行はやめて、参加者が、それぞれに目的を持って参加する自立的な山行を目指すようになりました。その結果、マイクロバスを利用して大勢の参加者で行くようないわゆる“連れて行ってもらう山行”が少なくなりました。このような参加者の意識変化により、例えば地図読みを中心に参加する人、本格的な岩や雪の山を目指す人など、山行内容がバラエティーに富んだものとなりました。

特に、支部主催の「登山学校」が出来てからは、学校を卒業した方々の参加者も多くなり、その要望に沿うよう多様な山行を計画する必要性が生じてきました。それに伴い、リーダーそれぞれにも特色を持った山行を計画することが求められるようになりました。

しかし、支部全体の高齢化の影響などにより、そのような参加者の多様な要望に叶うリーダーを見つけることが年々難しくなってきています。女性リーダーの発掘も含めて、今後の東海支部の大きな課題となっています。

本来ならば、我々山行委員は、各山行の連絡・調整をすることが主な職務ですが、現在では半数近くの山行委員自身がリーダーを兼ねるような状況となっています。委員のなり手も少なくなり、毎年発掘に苦労をしています。更なる支部員のご協力をお願い致します。

もう一つ印象に残っていることは、何といってもこの２年間のコロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言の発出等により、多くの山行が中止になってしまったことです。この２年間に実施出来た山行回数は、全山行計画の３割程度になってしまいました。会員の皆様には申し訳なく思っております。今年度になってからはワクチン接種の普及等により徐々に感染拡大傾向も収束に向かっています。

今後は、会員の皆様のご要望に沿った一層魅力ある山行が計画・実施され、支部山行が益々活発になることを期待しています。

最後になりますが、今後は、東海支部の充実・発展に陰ながらご支援出来たらと願っています。山行委員会の皆様、お世話になりました。

（鈴木愼吾）

●「大御影山・大日岳」に参加して

新緑のブナの原生林を狙った大御影山・大日岳山行は、天気に恵まれ期待以上の山行となりました。遠くは真っ白な白山を遠望でき、伊吹山はじめ琵琶湖越しの鈴鹿山脈や高島トレイルの山々、若狭湾越しには若狭富士・青葉山などが望めました。また、新緑のブナの木々は木漏れ日で明るい大空間を作っていて、一本一本が幹の太さや枝振りを駆使し、力強さあるいは妖艶さを醸し出しており、観ていて飽きがこず何度も立ち止まってしまいしました。さらに足元には、小さい草花が精一杯咲き誇っていてここにも山の春の到来を感じとることができました。

もちろん、安全登山のためのポイントについても、CL、ADから各所でコメントがあり大変有意義な山行でもありました。今、山行を振り返ろうと地形図を前にしていますが、頭の中はHPにどんな支部山行がupされているのか気になっています。

（天澤順一）

支部友コーナー

◆支部友委員会山行計画（令和4年10月～12月分）

10月2日（日）☆
　山域：三河高原　山名：物見山
　ﾘｰﾀﾞｰ：金谷正起

10月2日（日）☆
　山域：野坂山地　山名：　野坂岳（913m）
　ﾘｰﾀﾞｰ：今津英一朗

10月9日(土)　☆
　山域：島田市　山名：八高山（710m）
　ﾘｰﾀﾞｰ：近藤政仁　ｻﾌﾞﾘｰﾀﾞｰ　田中 進

10月22日（土）☆☆
　山域：飛騨南部　　山名：白草山(1,641m)
　ﾘｰﾀﾞｰ：高松信治

11月12（土）☆☆
　山域：越美山地　山名：高賀山(1,224m)
　ﾘｰﾀﾞｰ：今津英一朗　　ｻﾌﾞﾘｰﾀﾞｰ：榊 將美

11月12（土）☆
　山域：京都北山　山名：愛宕山（924m）
　ﾘｰﾀﾞｰ：村瀬恭平

11月13日（日）☆☆
　山域：鈴鹿伊船　　山名：仙ヶ岳（961m）
　ﾘｰﾀﾞｰ：倉橋智司

11月19（土）☆☆
　山域：鈴鹿山脈　　山名：日本コバ(934m)
　ﾘｰﾀﾞｰ：高松信治

11月26（土）
　山域：新城市　山名：宇連山（929m）
　ﾘｰﾀﾞｰ：近藤政仁　ｻﾌﾞﾘｰﾀﾞｰ：田中 進

12月3（土）☆☆
　山域：鈴鹿山脈　　山名：国見岳(1,170m)
　ﾘｰﾀﾞｰ：磯部 隆

12月11日☆☆
　山域：鈴鹿　山名：竜ヶ岳(1,099m)
　ﾘｰﾀﾞｰ：今津英一朗

支部友会員数　令和4年5月末現在　39名

第53回「スマホ・パソコンを地図に活用する」
日時：8月9日(火)19：00～21：00 支部ルーム
講師:鈴木慎吾氏(東海支部山行委員会委員長)

第54回「朝明ミーティング」朝明茶屋泊り
日時：10月8日(土)・9日(日)
　1日目　分散登山（鈴鹿連峰）
　　夕食バーベキュー・キャンプファイアー
　2日目　ファーストエイド講習。
　　ロープワーク実技講習

山行対象者　支部友会員及び支部会員

申込み方法　・支部友会員は申込締切日までに、各山行リーダーが示す方法で申し込む。
・締切日　原則山行日1ヶ月前まで。（締切日を過ぎての参加空き情報はﾘｰﾀﾞｰに直接問い合わせ下さい）
・支部会員は申し込み締切日の翌日以降山行のリーダーへ問い合わせる。
・山行の募集人員を超えない範囲で、支部会員の参加申し込みを受け付ける。

ﾘｰﾀﾞｰ連絡先
尾上　昇　　FAX：052-832-3878
　ﾒｰﾙ：onoe@onoe.co.jp
金谷正起　　携帯：090-9931-3600
　ﾒｰﾙ：kanaya.masaki@rouge.plala.or.jp
榊　將美　　携帯：090-7237-4410
　ﾒｰﾙ：m.sakaki@minds-consulting.jp
村瀬恭平　　携帯：090-4186-9876
　ﾒｰﾙ：hoshizakari@docomo.ne.jp
田中　進　　携帯：090-9191-8666
　ﾒｰﾙ：t-susumu@peace.ocn.ne.jp
今津英一朗　携帯 090-2616-7549
　ﾒｰﾙ：imazu.eiitirou@maroon.plala.or.jp
磯部　隆　　携帯：090-9180-7245
　ﾒｰﾙ：takass@yk.commufa.jp
高松信治　　携帯：090-3156-5268
　ﾒｰﾙ：takama2nobu3@yk.commufa.jp
松本陽子　　携帯：090-7859-4031
　ﾒｰﾙ：yo-kom@nifty.com
近藤政仁　　携帯：090-2183-8125
　ﾒｰﾙ：vft55ud55@gmail.com
倉橋智司　　携帯：090-8673-7180
　ﾒｰﾙ：　ilyt6by8@qc.commufa.jp

第 18 回東海岳人写真展のご案内!!

写真展実行委員会

来年、2023 年 2 月 21～26 日、名古屋市民ギャラリー栄にて、
第 18 回東海岳人写真展を開催します。
今年 10 月に開催要領をお知らせして、10～11 月に作品の募集を予定しています。
ふるってご参加をお願いします。
また、従来の全紙サイズだけでなく、やや小型の A3 サイズでの展示も行います。
お気軽に応募のご検討をお願いします。

第 17 回東海岳人写真展

会　務　報　告

【2022 年 3 月常務委員会】

1、支部長挨拶（高橋）：カナダから帰ってきた山田さんの壮行会は 3/25 に実施する。次年度の取組についてはコロナ後に向けて計画を立てて頂いている。支部員数が微減している状況。総会に於いて各委員会の紹介等で支部ライフの楽しさを PR し、会員増につなげてほしい。

2、総務委員会（今津）：退会者 4 名、入会者 1 名、他 6 名程支部友から転籍予定。ガイドブック改定について、新組織改定・規約改定を記載予定。60 周年国内事業は終了。支部懇談会は調整中。古道調査委員会参加は 10 名。猿投の森交流会は支部から提案を行うが内容示してほしい。今年の総会については 3 部制として OMC ビルの 4F で行う。

3、会計（奥山）：昨年度の委員会費用残金の返金を遅くても 3 月末迄に明細を報告の事。

4、支部友委員会（金谷）：2 月・3 月は県内山行のみの実施。夏山山行について今年の夏山は９コースの予定。

5、山行委員会（鈴木）：蔓延防止期間中、山行は出来なかった。リーダー育成は新候補 3 名が育った。新規山行委員には新たに 3 名を予定する事で 18 名とした。委員長交代で新山行委員長は稲葉氏になる旨報告された。

6、亀の会（加藤）：蔓延防止期間中で山行は中止。3 月の歩こう会は 3 月 11 日、17 日に県内で実施。3 月 24 日に御堂山・砥神山を参加者 20 名で実施。

7、猿投の森づくり委員会（和田）：コロナの影響を受けず、なごや環境大学の講座や炭焼き、伐倒を実施した。山桜フィールドでは自然造りを進める為、テント 2 張り目も持込、順調に作業を継続している。道具も古くなってきたので機材の入れ替えも図る様にしたい。

8、東海ユース（服田）：会員動向、現在 15 名、3 月末で 2 名退会。今年度は計 3 名退会、1 名新規入会でトータル 2 名減となった。定例山行は報告書の通りで 2 月・3 月は個人山行に切り替えて実施した。また、支部のウエブサイトに東海ユースのページを作成した旨報告された。

9、支部報委員会（星）：記事はほぼ集まった、金曜日以降に印刷。発送日は 4 月 5 日の予定。東海山岳 12 号も記事が大体集まってきた。

10、学生連盟（丸岡）：欠席。報告事項として 3 月 23 日八ヶ岳にアイスクライミングを実施。

11、登山学校運営委員会（服田）：2 月の計画は 6 講座の内 4 講座が蔓延防止期間の為中止。3 月は 1 講座が中止になった、4 月は予定通り実施する。クラスによっては補講として月に 2 回実施するクラスもある。第 6 期の体制については初級と中級の 4 クラスで運営をする。上級クラスは休校とする。今後クラスの呼び名を A クラス・B クラスと変更する。机上講習は気象講習・装備講習を年 2 回実施する。

12、自然保護委員会（井藤）：3 月の委員会は中

止。“猿投の森を楽しもう”の募集は1名参加。
13、ボランティア委員会（前田）：来年春実施を念頭に準備中。春のブラインド登山、SON愛知登山、タンポポ登山、を各担当部所と打合せを進めてゆく。
14、遭難対策委員会（山田）：気象講座について此れまで夏と冬に行っていたが、今度は3月に春の残雪期の気象講座を行う。装備はビーコンが4個あるが足りないので1個買い足す事にした。2022年度の活動方針としては、委員長交代をして高松さん、副委員長は林さんにお願いをした。また、登山計画書については登山計画書の手引きを作成して支部関係者全員に配布する予定。
15、写真展実行委員会（伏屋）：写真教室は5月5日に一回目を行う。当初予定通り来年度は3回実施する。写真展は来年2月に予定している。写真山行は5月9・10日に西穂高独標を計画している。
16、技術向上委員会（清水）：コンパス、コンパスエキスパート等について、三重県は2020年3月に利用開始し愛知県も2021年8月から利用できるようになった。技術向上委員会としては愛知県のような低山の場合はコンパスエキスパートを推奨したい。今後机上講習でも行っていきたい。
17、古道調査委員会（西山）：3月24日に全国の古道120コースの選定が決まった旨報告有。
出席：高橋、今津、和田、服田、前田、西山、石田、奥山
リモート参加：清水、星、加藤、鈴木、千葉、山田、佐野、井藤、金谷、伏屋
【2022年4月常務委員会】
日時:4月27日(水)19時(ZOOMとの並行開催)
1、支部長挨拶（高橋）：4/24日曜日、谷剛士さん、山田利行さんはカンチュンナップ北壁を無事登頂と報告有り。
5/15(日)総会は滞りなく開催したい。岐阜支部、創立50周年記念の式典が高山市である。10/23.24皆さん参加してほしい。
2、総務委員会（今津）：支部員入退会、退会1名。入会、支部友から12名、他から1名。
ヒマラヤ助成金、本部より30万円と東海支部チャレンジ基金から助成する。ガイドブック改訂、7月発行。総会5/15、347人に総会の案内を送った。二分の一の委任状が必要。各委員会から要旨説明を。
3、愛知岳連（鈴木絵美子）：鈴木愛子氏から引き継ぐ。テント場でない所でテントを張ってSNSに投稿すると人が殺到するので投稿しないようにして欲しい。御在所、北谷小屋、積極的に利用してほしい。
4、支部友委員会（金谷欠席）：【夏山の誘い】申込み締め切った。申込み少なく空きがあるので支部員も参加できる。支部友委員が少なくなっていて夏山フェスタで勧誘していく。
５、山行委員会（稲葉）：鈴木慎吾氏から引き継ぐ。3月の山行は4つの山行を予定していたが３つ中止（新型コロナの影響でない）。2022年度より天澤委員、大西委員、伊与田委員に加え鬼頭Lが山行委員としても参加。支部BOX（クラウドサービス）の活用検討。
6、亀の会（加藤）：まん延防止が解除され山行が再開された。
7、猿投の森づくり（和田）：3/26で名古屋環境大学の4回の講座は終了。5/11、緑化推進機構からの年間の助成金を倍増してもらうよう交渉中（古くなった道具を購入予定）。借りているやまじ小屋の小屋主から400坪ほどの畑を貸してもらうことになった。
8、東海youth（服田）：3月末２名退会したので13名。5/7ボランティア委員会のブラインド登山に６名参加。支部のHPを見た男性から入会問い合わせ。５月の定例山行に体験参加。
9、青年部（荒木）：入会希望者３名、申込書を記入してもらう。立山残雪合宿5月予定を7月に延期。5/21、5/22本部youthと広島支部を交えて御在所クライミング講習会予定。山田利行さんに講師依頼しクライミングを計画中。
10、学生連盟（丸岡）：4/20定例会、名工大以外は参加。毎月第3(水)定例会。学連の新歓企画、日帰り山行、伊吹山。5/21.22青年部のクライミングに参加予定。
11、登山学校（服田）：第6期　CL4名、SL9名、クラス担当を持たないサポートＳＬ3名。Ａクラス（初級）定員6名、3クラス。Ｂクラス（中級）定員5名、1クラス。Ｂクラス特待生2名を決定。夏山フェスタで勧誘する。
12、東海支部報（星）：原稿は5月末までに提出希望。表紙はカンチュンナップ登山。
13、ボランティア委員会（前田）：5/7春のブラインド登山31名参加。5/28SON(知的障がい者)支援登山。6/3タンポポ登山。
14、遭難対策委員会（山田）：山田明美氏から高松信治氏へ交代。R3年度の登山届は763件。コロナの影響か例年より200件ほど少ない。

15、写真展実行委員会（伏屋）：5/5 山の写真教室 16 名、ルームにて開催予定。第 18 回写真展は 2023 年 2 月 21～26 日名古屋市民ギャラリー栄で開催予定。
16、デジタルメディア委員会（欠席）：東海支部ＨＰに東海 youth の紹介ページ新設。
17、技術向上委員会（清水）：昨年 10 月の道迷い講習会を今年も実施。登山計画書は家族に渡すこと。
18、古道調査（西山）：4/20 伊勢神峠，杣路峠（根羽村の境）。5/14 八風峠調査実施。
19、会計（奥山）：今年度の会費は UFJ 銀行に振込とする。
参加者：高橋・今津・鈴木（絵）・稲葉・加藤・和田・服田・荒木・丸岡・星・前田・山田・伏屋・清水・西山・奥山

【2022 年 5 月常務委員会】
日時:5 月 25 日(水)19 時(ZOOM との並行開催)
1、支部長挨拶（高橋）：5 月 15 日（日）に開催された支部総会･その後の各委員会報告は皆様のご協力により滞りなく終えることができた。
　今年度が始まり、コロナの状況も落ち着いて来ているので、中止縮小されていたイベント.企画計画.山行等を感染対策に十分に配慮の上積極的に取り組んで欲しい。
　夏山フェスタは多数の参加が見込まれると思う。各委員会も顔を出して積極的に PR を。
2、総務委員会（今津）：入退会については今津を通してお願いしたい。直接入会申請後では個人情報が得にくくなるため。
　亀の会及びボランティア委員会に各々10 万円の寄付が杉山雄彦様よりなされた。
　5 月 15 日に開催された総会は、全議案が賛成多数で可決。委員会報告時のスケッチクラブ欠落についてお詫びあり。
　ガイドブック改訂について改定などある場合は 6 月 5・6 日までに連絡を。
3、愛知岳連（鈴木絵美子）：愛知県山岳連盟主催行事変更について。北谷小屋の管理と利用促進について。使用については「愛知県山岳連盟会員証」が必要（各委員会委員長は所有）。
　学連主催の講習会参加については学連の会員資格と参加費が必要。
4、支部友会（金谷）：支部友山行は 4 月 5 月共好天に恵まれ順調に行われた。
　8 月の支部友ミーティングでは鈴木慎吾氏によるスマホ・パソコン活用法の講習を予定。
5、山行委員会（稲葉）：山行について順調に消化出来ている。新規山行委員のリーダー育成のために訓練山行を行なっていく。
6、亀の会（加藤）：新規入会 2 名、現在会員数 52 名。寄付金について、使途については会の話し合いの中で検討していく。
7、猿投の森づくりの会（和田）：緑化推進機構訪問し更なる助成金の増額を要請。
「やまじ小舎」より無償で借り受けた 300 坪の畑について（ゆめファーム）として畑作り運用をしていく。希望者は連絡を。
「わいがや講座」再開第一回開催(5/21)。
8、東海ユース（服田）：活動に関心を持たれている女性がいるので運営委員会に参加してもらって理解を深めて頂く予定。
9、青年部（荒木）：5 月 21・22 日御在所にて本部，東海支部、広島支部と交流会を実施。参加者 50 人程で度盛会裡に終わった。
　夏山フェスタ応援要請で参加
10、学生連盟（丸岡）：5/21.22 の交流会参加では多くの方に指導いただき大変有意義だった。
12、登山学校　（服田）：4 月 5 月共に順調にカリキュラム消化。夏山フェスタにて A クラス（初級）8 名募集予定。
13、海外登山委員会（高橋）：カンチュンナップ登攀隊と同様にインドヒマラヤ隊にも支援金として 10 万円を支出。双方とも 60 周年記念事業として支出を行う。
　山田利行君が今年度はマナスルを走って早く登るファストライト登山に挑戦予定。またその先を目指し最大限の支援を行っていきたい。
14、ボランティア委員会（前田）：新規メンバー3 名加入。覚障がい者全国交流登山の件について:2 年ごとの開催。9 月 23 日～9 月 25 日大分県で開催東海支部からも参加予定。
15、遭難対策委員会（高松）：登山届・チェック表提出状況 44/55。個人山行者に一部リスクチェック表の添付が無い。夏山気象講座（7 月 9 日 16:00～18:00)。ツエルト泊体験会　テスト開催(5/28-5/29) 朝明茶屋。
16、デジタルメディア委員会（井上）：メールマガジンのさらなる有効活用のために、配信先名簿の整備が必要。未登録者の洗い出しと登録勧誘。その後の対策につなげていく。
17、技術向上委員会（清水）：安全登山教室＜6 月号＞として命に係わる危険な生物に注意を喚起し、毒のある生物の回避策と「やられた」時の対処策について広く周知をおこなう。ホームページ掲載。

参加者：高橋・今津・鈴木（絵）・井上・服田・稲葉・清水・高松・千葉・前田・荒木・丸岡・西山・加藤・井藤、金谷・和田・佐野

ルーム日誌

━・━　３月　━・━・━・━・━・━

大会議室　　/小会議室

1（火）　県岳連　　/TNCC
2（水）　青年部
4（金）　古道塩の道
6（日）　東海ユース
7（月）　支部友委員会
9（水）　山行委員会
10(木)　自然保護委員会
11(金)　全国支部懇談会
14(月)　登山学校運営委員
15(火)　ボランティア委員会
16(水)　東学連
17(木)　正副支部長会議
　総務委員会　/技術向上委員
21(月)　図書委員会・読図
23(水)　常務委員会
28(月)　支部友読図会
29(火)　遭難対策委員会

━・━　４月　━・━・━・━・━・━

大会議室　　/小会議室

1（金）　古道塩の道
4（月）　支部友委員会
5（火）　県岳連　　/TNCC
6（水）　青年部
7（木）　写真展実行委員会
8（金）　全国支部懇談会
11(月)　登山学校運営委員会
12(火)　支部友ミーティング
13(水)　山行委員会
14(木)　自然保護委員会
18(月)　図書委員会・読図会
19(火)　ボランティア委員会
20(水)　東学連
21(木)　正副支部長会議
　総務委員会　/技術向上委員会
22(金)　亀の会
25(月)　支部友山行打ち合わせ/支部友読図会
26(火)　遭難対策委員会
27(水)　常務委員会

会員異動

入会：南千恵子(16920)　遠藤　忍(16926)
岩月邦文(16919)　星長むつみ(16922)
杉浦節子(16923)　松尾久美子(16924)
山田しのぶ(16925)　生田晶子(16937)
中島美枝(16939)　野呂弘子(16935)
伊与田玲子(16943)　門間晶子(16942)
吉田玲子(16934)　波多野哲也(16944)
王　思(16940)

退会：横地達夫(15309)　澤田信也(16422)
犬飼美弥子(16148)　田中基子(16147)

INFORMATION

【写真展実行委員会からのお知らせ】

第２・３回山の写真教室(初級・中級)開催
第１回は５月５日に行い、好評でした。
第２回は７月７日(木)午後６～８時、東海支部ルーム会議室
第３回は９月１日(木)午後６～８時、東海支部ルーム会議室　　で行います。参加費無料。

◎　申し込み方法
下記アドレスにメールをお願いします。担当；伏屋　　shasinten@jactokai.net
　件名；第____回山の写真教室
　本文；参加回、(支部員、支部友、猿投の森)会員No.氏名、写真添削希望(有・無)を記入
　添付：写真のファイル　jpg ファイル 6 枚以下(ファイルサイズの合計を 10 メガ以下とする)

写真展実行委員長　伏屋　満

【ボランティア委員会からのお知らせ】

春の主要行事は、全て無事終了しました。詳しくは、本文にて紹介しています。

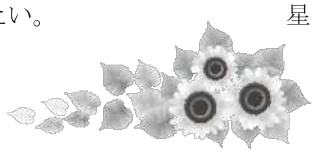
秋の各行事の実施に向け準備を進めていますので、ご協力をお願いします。

ボランティア委員長　前田隆久

編集後記

第８回夏山フェスタの会場では、多くの入場者で賑わった。コロナの感染防止対策が定まり、山歩きで実践された登山愛好家が戻ってきた。

支部報の編集作業が終盤にあるこの時期の開催となった、夏山フェスタの詳細は、次号で取り上げたい。　　星　一男



SINCE 1975
mont·bell
FUNCTION IS BEAUTY

最新情報はこちらから
www.montbell.jp

フリーコール 0088-22-0031　携帯 IP電話 06-6536-5740
株式会社 モンベル 【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス

法務相談は行政書士にお任せください!
相続　会計　許認可
1時間無料相談
あなたの不安を解決に導きます
遺言書、遺産分割協議書、
法定相続情報一覧図作成、任意成年後見の相談など

西山行政書士事務所 ☎052-961-6506
名古屋市中区丸の内3-21-21丸の内東桜ビル1004
www.nygs-office.com
久屋大通駅 徒歩1分

CMC
住いのコンサルタント
㈲富士見企画
〒460－0014
名古屋市中区富士見町8番3号

オフィスに関する悩み事、丸天産業が全て解決します。

ファシリティマネジメントによるオフィス構築や
デザイン、インテリアやセキュリティなど
オフィスのすべてが揃っています。

オフィスのお困りごとを丸がかえでお応えいたします。

郵送無料 Honesty
コンサルティング事例集
オフィスに関するお悩み事の解決事例が載っています。
お申込みは下記までお電話ください。

株式会社　丸天産業
本社　〒460-0008　愛知県名古屋市中区栄５丁目10-34
TEL：052-241-3686　FAX：052-241-0457

『東海支部報』では、
広告を募集しております

表４（裏表紙）掲載

※掲載のご希望・お問合せは
jactokai107@gmail.com まで

企 画・デザイン・印 刷

株式会社 ASAI 隆文社

株式会社　浅 井 隆 文 社
〒461-0044　名古屋市東区矢田東１番22号
TEL (052)719-0677　FAX (052)719-0678
E-mail : info@asai-rbs.co.jp